

秋田県文化財調査報告書第261集

東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XX

—— 蟹子沢遺跡 ——

1996・3

秋田県教育委員会

東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XX

—— かにこざわ 蟹子沢遺跡 ——

1996・3

秋田県教育委員会

序

東北横断自動車道秋田線は、岩手県北上市で東北自動車道から分岐して奥羽山脈を越え、秋田県南部の横手盆地を經由し、県中央部の秋田平野に至る高速道路として計画されました。

新しい歴史は常に古い歴史の上に折り重なるように構築されていきます。計画線内にも多くの遺跡の存在することが確認され、秋田県教育委員会では道路建設工事に先立って、路線内に存在する遺跡の発掘調査を実施して、記録保存に努めてまいりました。

蟹子沢遺跡も秋田市濁川地区を通過する計画路線で確認された遺跡であり、発掘調査を平成6年度に実施いたしました。その結果、縄文時代の遺構と遺物、弥生時代と平安時代の遺物が検出され、縄文時代前期末葉から中期前葉にかけて集落が営まれていたことが分かりました。

本報告書は、これらの調査記録をまとめたものでありますが、埋蔵文化財の保護に広く活用され、郷土の歴史や文化財を研究する資料として、多くの方々に御利用いただければ幸いに存じます。

最後に、本調査の実施及び本書の刊行に際し、御協力を賜りました日本道路公団仙台建設局、秋田市、秋田市教育委員会をはじめ、関係各位に対し厚く御礼申し上げます。

平成8年3月

秋田県教育委員会

教育長 橋本 顕 信

例 言

1. 本書は、東北横断自動車道秋田線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書の20冊目の報告書である。
2. 本書は、1994(平成6)年度に調査された秋田市に所在する蟹子沢遺跡の調査結果を取めたものである。
3. 調査の内容については、すでにその一部が年報などによって公表されているが、本報告書を正式のものとする。
4. 本書の執筆は、栗澤光男と藤澤 昌が行った。
5. 第5章「自然科学的分析」は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した報告であるが、遺構の名称など一部を補訂している。
6. 本書に使用した地図は、国土地理院発行の5万分の1『秋田』・『羽後和田』と2万5千分の1『土崎』・『松原』・『秋田西部』・『秋田東部』、秋田市発行の2千5百分の1地形図、日本道路公団仙台建設局秋田工事事務所提供の1千分の1地形図である。
7. 本報告書の作成にあたり、以下の方々から御教示をいただいた。記して感謝申し上げる次第である。(敬称略)

加藤三千雄、西野秀和、五十嵐芳郎、菅原俊行、石郷岡誠一、西谷 隆、安田忠市、
進藤 靖

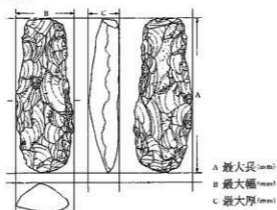
凡 例

1. 遺構番号は、その種類ごとに略記号を付し、検出順に通し番号を付したが、後に検討の結果、遺構ではないと判断したものは欠番とした。また、遺構・遺物には下記の略記号を使用した。

SI・・・竪穴住居跡 SK・・・土坑 SR・・・土器埋設遺構
 SKP・・・柱穴様ピット RP・・・土器 RQ・・・石器
 F・・・剥片

なお、遺構図面に記したSは礫を示している。

2. 遺跡基本層位と遺構土層図中の上色・土師器・須恵器の色調の表記は、農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』によった。
3. 挿図中の須恵器断面は、土師器と区別するため黒く塗りつぶした。
4. 挿図中の遺物番号は、遺構内外の出土を問わず、土器・石器ごとに通し番号を付してあり、その番号は、図版中の遺物番号と対応している。
5. 土層番号に用いた数字は、ローマ数字を遺跡基本層位に、算用数字を遺構土層に使用して区別した。
6. 石器の計測部位は、下図のとおりである。また、計測値の単位は、長さ・幅・厚さがmm、重さがgである。



7. 挿図に使用したスクリーントーンは、下記のとおりである。



目 次

序
例言
凡例
目次

第1章	はじめに	1
第1節	発掘調査に至るまで	1
第2節	調査の組織と構成	3
第2章	遺跡の立地と環境	4
第1節	遺跡の立地	4
第2節	歴史的環境	6
第3章	発掘調査の概要	10
第1節	遺跡の概観	10
第2節	調査の方法	13
第3節	調査の経過	13
第4章	調査の記録	17
第1節	検出遺構と遺構内出土遺物	17
1	竪穴住居跡	17
2	土坑	26
3	土器埋設遺構	30
4	柱穴椽ビット	34
第2節	遺構外出土遺物	43
1	縄文時代の遺物	43
2	弥生時代の遺物	70
3	平安時代の遺物	70
4	その他の遺物	73
第5章	自然科学的分析	74
第1節	遺構の年代および出土した炭化材の樹種	74
第2節	遺体埋納の可能性について	78
第6章	まとめ	81

挿 図 目 次

第1図	秋田南 I・C 以北の路線と道跡	2
第2図	遺跡位置図	4
第3図	地形区分図	5
第4図	周辺遺跡位置図	7
第5図	遺跡周辺地形図	11
第6図	工事計画と調査範囲	12
第7図	調査区の基本層位	13
第8図	遺構配置図	15・16
第9図	S I 08	19・20
第10図	S I 08 Pit12・13・14と地床炉	21
第11図	S I 31	23・24
第12図	S I 31地床炉	26
第13図	S K28・37・51・57	29
第14図	S K42・44	30

第15図	S R 21・36・50・52	33
第16図	S K P 29・46・54・55・59・60	35
第17図	遺構内出土土器(1)[S I 08]	36
第18図	遺構内出土土器(2)[S I 08]	37
第19図	遺構内出土土器(3)	38
第20図	遺構内出土土器(4)	39
第21図	遺構内出土土器(5)	40
第22図	遺構内出土土器(1)	41
第23図	遺構内出土土器(2)	42
第24図	遺構外出土土器(1)	47
第25図	遺構外出土土器(2)	48
第26図	遺構外出土土器(3)	49
第27図	遺構外出土土器(4)	50
第28図	遺構外出土土器(5)	51
第29図	遺構外出土土器(6)	52
第30図	遺構外出土土器(7)	53
第31図	遺構外出土土器(8)	54
第32図	遺構外出土土器(9)	55
第33図	遺構外出土土器(10)	56
第34図	遺構外出土土器・土製品(11)	57
第35図	遺構外出土土器(1)	60
第36図	遺構外出土土器(2)	61
第37図	遺構外出土土器(3)	62
第38図	遺構外出土土器(4)	63
第39図	遺構外出土土器(5)	64
第40図	遺構外出土土器(6)	65
第41図	遺構外出土土器(7)	66
第42図	遺構外出土土器・土製品(8)	67
第43図	遺構外出土土器(12)	71
第44図	遺構外出土土器(13)	72

表 目 次

第1表	周辺遺跡一覽	8
第2表	S I 08 Pit計測一覽	18
第3表	S I 31 Pit計測一覽	25
第4表	石器計測一覽(1)	68
第5表	石器計測一覽(2)	69
第6表	年代測定および樹種同定結果	76
第7表	蟹子沢遺跡のリン・カルシウム分析結果	79

図 版 目 次

図版1	1. 調査区遠景上空から(東▷西) 2. 調査区全景上空から(真上)
図版2	1. 市道西侧調査前近景(南西▷北東) 2. 市道东侧調査前近景(北西▷南東)
図版3	1. 市道东侧調査前南東端部近景(南東▷北西) 2. 市道东侧調査前南東端部近景(北▷南)

- 図版4 1. 市道西側調査後近景(西▷東)
2. 市道東側調査後近景(北西▷南東)
- 図版5 1. 市道東側調査後東端部近景(南東▷北西)
2. 市道東側調査後南東端部近景(北東▷南西)
- 図版6 1. S I 08(南▷北)
2. S I 08地床炉(東▷西)
3. S I 08 P it 12(南▷北)
4. S I 08 P it 13(北東▷南西)
5. S I 08 P it 14(東▷西)
- 図版7 1. S I 31(南東▷北西)
2. S I 31地床炉(東▷西)
3. S I 31 P it 2(南東▷北西)
4. S I 31 P it 4(南東▷北西)
5. S I 31 P it 5(南東▷北西)
- 図版8 1. S K 28(南▷北)
2. S K 37(南東▷北西)
3. S K 42(南▷北)
- 図版9 1. S K 44土器出土状況(南▷北)
2. S K 44(南▷北)
3. S K 51(東▷西)
- 図版10 1. S K 57(東▷西)
2. S R 24(南▷北)
3. S R 36(南▷北)
- 図版11 1. S R 50(東▷西)
2. S R 52(南▷北)
3. S K P 54・55・59・60(南▷北)
- 図版12 遺構内出土土器(1)
- 図版13 遺構内出土土器(2)
- 図版14 遺構内出土土器(3)
- 図版15 遺構内出土土器(4)
- 図版16 遺構内出土石器
- 図版17 遺構外出土土器(1)
- 図版18 遺構外出土土器(2)
- 図版19 遺構外出土土器(3)
- 図版20 遺構外出土土器(4)
- 図版21 遺構外出土土器(5)
- 図版22 遺構外出土土器(6)
- 図版23 遺構外出土土器(7)
- 図版24 遺構外出土土器・土製品(8)
- 図版25 遺構外出土石器(1)
- 図版26 遺構外出土石器(2)
- 図版27 遺構外出土石器(3)
- 図版28 遺構外出土石器・石製品(4)
- 図版29 遺構外出土土器(9)
- 図版30 遺構外出土土器(10)
- 図版31 炭化材(1)
- 図版32 炭化材(2)
- 図版33 炭化材(3)

第1章 はじめに

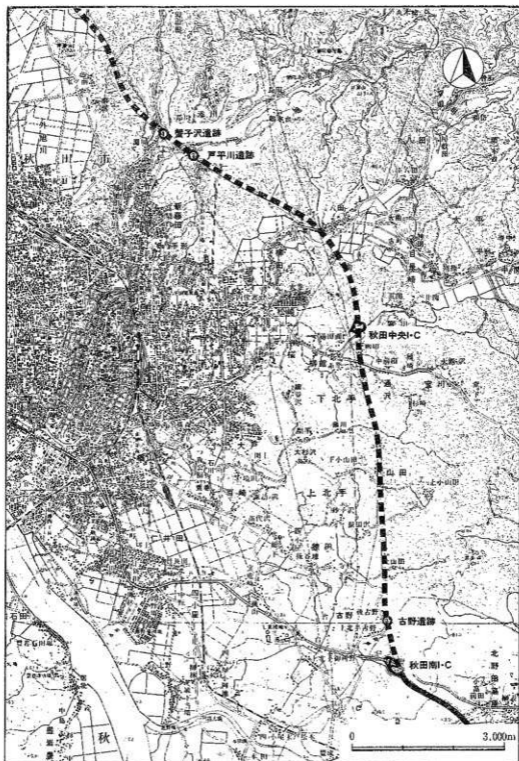
第1節 発掘調査に至るまで

東北横断自動車道秋田線は、首都圏への時間短縮と県内の高速交通体系の改善など、地域の生産活動と県民生活に必要な情報や資源の交流を促進することを目的として計画された高速道路である。道路は、岩手県北上市で東北自動車道から分岐し、横手市・大曲市を経て秋田市に至る。このうち秋田南I・Cから横手I・Cまでの間57.4kmの建設が、1978(昭和53)年11月の第8次執行命令によって建設され、1991(平成3)年7月に供用が開始された。次いで横手I・Cから湯田I・Cまでの19.7kmが、1986(昭和61)年3月に第9次執行命令により建設され、1995(平成7)年11月に供用が開始された。現在、秋田南I・Cと湯田I・Cの間が通行可能となっている。

なお、両区間の工事我先立ち、秋田県教育委員会では、秋田南I・Cから横手I・Cまでの工事路線内に存在する27遺跡の発掘調査を1985(昭和60)年から1989(平成元)年まで実施した。横手I・Cから湯田I・Cまでのうち、秋田県側の工事路線内に存在する10遺跡の発掘調査は1990(平成2)年から1993(平成5)年まで実施された。

現在建設工事が進められている秋田南I・Cから秋田北I・Cまでの16.0kmについては、1990(平成2)年4月に第11次施行命令が下された。これに伴い1989(平成元)年に日本道路公団仙台建設局長から秋田県教育委員会教育長あてに、道路計画路線内に所在する埋蔵文化財包蔵地の分布調査の依頼があった。これを受けて秋田県教育委員会では、1989(平成元)年から1990(平成2)年まで遺跡分布調査を実施し、計画路線内に4遺跡が存在することを報告した。^(註1) 4遺跡は、秋田南I・Cから秋田北I・C側に古野遺跡、石神遺跡、戸平川遺跡、蟹子沢遺跡である。これら計画路線上に存在する4遺跡の取り扱いについて協議した結果、路線変更が不可能で工事によって消滅する遺跡は、記録保存の措置をとることとした。その後、1992(平成4)年から1994(平成6)年に各遺跡の範囲確認調査を実施した結果、石神遺跡については遺跡の範囲が工事計画路線内に及んでいないことから調査が不要となり、発掘調査が必要な遺跡は古野遺跡、^(註2) 戸平川遺跡、^(註4) 蟹子沢遺跡の3遺跡であることが確定した(第1図)。

1994(平成6)年4月、秋田県知事と日本道路公団仙台建設局長の間で、古野遺跡と蟹子沢遺跡についての発掘調査委託契約書が交わされ、秋田県教育委員会は、同年5月から両遺跡の発掘調査を実施するに至った。



第1図 秋田南I・C以北の路線と遺跡

第2節 調査の組織と構成

遺 跡 名 蟹子沢遺跡

遺 跡 所 在 地 秋田県秋田市濁川字蟹子沢44-10外

調 査 期 間 平成6年5月11日～10月7日

調 査 面 積 7,000㎡

調 査 主 体 者 秋田県教育委員会

調 査 担 当 者 栗澤 光男 (秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第1科文化財主任)

藤澤 昌 (秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第1科学芸主事)

佐野 浩子 (秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第1科非常勤職員)

(平成7年3月退職)

太田 淳子 (秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第1科非常勤職員)

(平成7年3月退職)

総 務 担 当 者 藤肥 良清 (秋田県埋蔵文化財センター総務課主査)

佐藤 広文 (秋田県埋蔵文化財センター総務課主任)

須田 輝樹 (秋田県埋蔵文化財センター総務課主事)

調 査 協 力 機 関 秋田市教育委員会

日本道路公団仙台建設局秋田工事事務所

註1. 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第217集
1991(平成3年)註2. 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第239集
1993(平成5年)註3. 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第251集
1994(平成6年)註4. 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第259集
1995(平成7年)

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の立地

秋田市は県西部のほぼ中央にあって、日本海に面した秋田平野に開けた都市であり、県南東部から流れ下ってきた雄物川の河口部にあたる。

蟹子沢遺跡は、秋田市街地北北東の濁川地区に所在し、JR東日本秋田駅の北方約4.5km、北緯39°45'18"、東経140°08'15"に位置している(第2図)。

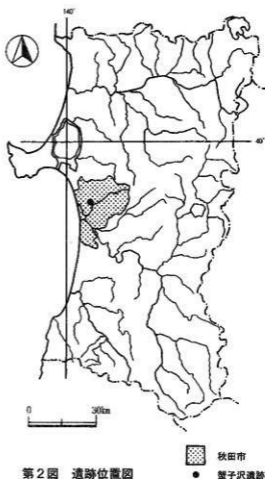
(註1)

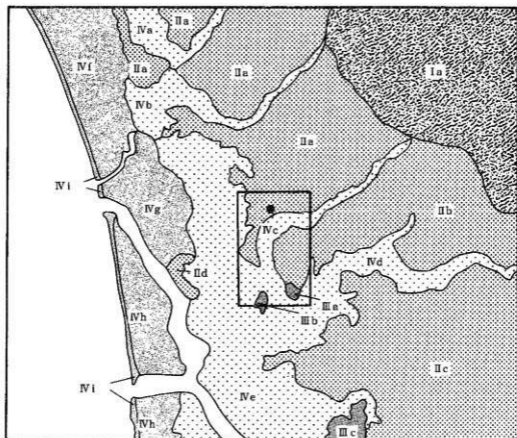
遺跡周辺の地形は、地形区分図によれば山地・丘陵地・台地・低地および砂丘地の4つに分けられている(第3図)。東部は出羽山地の一部である太平山(1,170m)を主峰とする太平山地、仁別山地(Ⅰa)によって囲われている。

この西麓には、北から順に上新城丘陵(Ⅱa)、羽黒山丘陵(Ⅱb)、和田丘陵(Ⅱc)が連なっている。これらの丘陵は全体的に平坦面が少なく、標高60~200mのかなり開折を受けた老年期の地形を呈しており、地質は第三紀鮮新世の青色砂質シルト岩(笹岡層)と青灰色塊状泥岩(天徳寺層)、同紀中新世の暗灰色泥岩(船川層)などから構成されている。

また、丘陵地の間には太平山地に源を発し、八郎潟残存湖に流れ込む馬踏川、直接日本海に注ぎ出る新城川、雄物川の支流である旭川・太平川などによってつくられた低地(Ⅳa~Ⅳd)があり、各低地側辺の丘陵地には数段の段丘が形成されている。

遺跡は上新城丘陵の南西端部が、東西を旭川に注ぎ込む沢水によって開折された南向きの舌状台地の先端部に立





- | | | |
|--|---|------------|
| | 仁別山地 (I a) | —山地 |
| | 上新城丘陵 (II a)・羽黒山丘陵 (II b)・和用丘陵 (II c)・高清水丘陵 (II d) | —丘陵地 |
| | 手形山台地 (III a)・千秋公園台地 (III b)・御所野台地 (III c) | —台地 |
| | 馬踏川低地 (IV a)・新城川低地 (IV b)・旭川低地 (IV c)
太平川低地 (IV d)・秋田低地 (IV e) | } 低地および砂丘地 |
| | 天王砂丘地 (IV f)・土崎砂丘地 (IV g)・勝平山砂丘地 (IV h) | |
| | 海岸低地 (IV i) | |

● 蟹子沢遺跡

第3図 地形区分図

□は第4図周辺遺跡位置図の範囲

地している。この台地標高は37～80mであり、旭川の現河川面(標高12m)との比高差は25～68mである。また、遺跡が占地する台地先端部は、旭川沿いに分布する3面の段丘のうち、下から2段目の中位面にあたる。

なお、本遺跡が立地する舌状台地から南東約0.9m、旭川左岸の羽黒山丘陵北裾の最も低い段丘上には、縄文時代の戸平川遺跡が所在している。

第2節 歴史的環境

秋田市では、昭和61年から63年にかけて行われた詳細分布調査で360カ所の遺跡が確認されており、遺跡の分布状況は新城川周辺以北、旭川、太平川流域で濃密であり、遺跡の立地は、山間部の館跡、須恵器・瓦窯跡を除外すると、市北東部の舌状台地、丘陵端部に集中しているとされている。本遺跡(168)周辺(第4図・図幅南北5km、東西3.5km)には、35遺跡が登録されている。そのほとんどの遺跡が、旭川によって形成された河岸段丘面や手形山台地上に分布している。以下、蟹子沢遺跡周辺で発掘調査された遺跡を中心に概観する。

旧石器時代の遺跡は調査されていないが、古城廻Ⅱ遺跡(155)で石刃が表採されている。

縄文時代の遺跡では、柳沢遺跡(220)が、昭和49年に手形山閉地造成に先立って発掘調査が行われ、縄文時代前期中葉～後葉の竪穴住居跡8軒などが検出された。うち1軒は長さ15m、幅5mの大形住居跡である。大松沢Ⅰ遺跡(192)は、秋田・昭和線地方道改良工事に伴い平成5年度に発掘調査が行われ、中期末～晩期までの土器が出土しているが、同時に検出された竪穴住居跡については時期を特定できていない。戸平川遺跡(174)は、蟹子沢遺跡と同様な経緯により、平成7年度から2カ年計画で調査が行われている遺跡である。平成7年度の調査では縄文時代晩期中葉の墓域と掘立柱建物跡などが確認されている。

弥生時代～古墳時代の遺跡については、この地域ではいまのところ確認されていない。

奈良・平安時代になると、秋田城(本遺跡から西南西約4.8km)や…ノ坪条里制遺構(228)などと関連すると考えられる遺跡が多く分布している。その中で、手形山窯跡(193)は、昭和49年に秋田考古学協会により発掘調査が行われ、8世紀後葉を中心とした時期に須恵器を焼成した窯跡を2基検出している。古城廻Ⅲ遺跡(156)は、平成5年に秋田市教育委員会により発掘調査され、平安時代前半の瓦・須恵器が出土している。また、前述の大松沢Ⅰ遺跡においても、平安時代の土師器などの遺物と同時代もしくはそれ以降と思われる掘立柱建物跡が検出されている。

中世では、この地を支配した安東氏の本拠である湊城跡が本遺跡の西約4.3kmにあり、それと関連すると考えられる城館遺跡の大堤館(167)・天館(172)・地ノ内館(173)・添川館(177)・

第4図 周辺道路位置図 (□は第5図道路周辺地形図の範囲)



第2層 周辺の地形

番号	遺跡名	所在地	時代	文献
1-151	三ノ堰	秋田市外旭川字三ノ堰	縄文・奈良・平安	8・10
1-153	太田	秋田市添川字太田	奈良・平安	8・10
1-154	古城廻Ⅰ	秋田市添川字古城廻	平安	8・10
1-155	古城廻Ⅱ	秋田市添川字古城廻	旧石器・奈良・平安	8・10
1-156	古城廻竊跡	秋田市添川字古城廻	奈良・平安	8・10
1-157	古城廻Ⅲ	秋田市添川字古城廻	平安	8・10
1-158	蓬田	秋田市添川字蓬田	奈良・平安	8・10
1-159	湯沢台Ⅰ	秋田市添川字湯沢台	縄文・奈良・平安	8・10
1-160	湯沢台Ⅱ	秋田市添川字湯沢台	縄文	8・10
1-166	大堤	秋田市外旭川字大堤	縄文	8・10
1-167	大堤館	秋田市外旭川字大堤	縄文・中世	7・8・10
1-168	蟹子沢	秋田市濁川字蟹子沢	縄文・平安	8・10
1-169	飛鳥田	秋田市添川字飛鳥田	縄文・平安	8・10
1-170	地ノ内Ⅰ	秋田市添川字地ノ内	縄文	8・10
1-171	地ノ内Ⅱ	秋田市添川字地ノ内	縄文	8・10
1-172	天館	秋田市添川字戸平川	中世	7・8・10
1-173	地ノ内館	秋田市添川字地ノ内	中世	7・8・10
1-174	戸平川	秋田市添川字戸平川	縄文・平安	8・10
1-175	鶴木台Ⅲ	秋田市添川字鶴木台	縄文・奈良・平安	8・10
1-176	高梨台	秋田市新藤田字高梨台	縄文	8・10
1-177	添川館	秋田市添川字古城廻	中世	7・8・10
1-189	山崎館	秋田市外旭川字山崎	中世	7・8・10
1-190	三嶽根	秋田市泉三嶽根	縄文・平安・中世	7・8・10
1-192	大松沢Ⅰ	秋田市手形字大松沢	縄文・平安	8・10・12
1-193	手形山竊跡	秋田市手形字大松沢	奈良・平安	4・6・8・10
1-194	大松沢Ⅱ	秋田市手形字大松沢	中世	1・5・6・8～10
1-217	久保田城	秋田市千秋公園等	近世	5・6・8～11
1-218	平田篤胤墓	秋田市手形字大沢	近世(国指定史跡)	8・10
1-219	蛇野	秋田市手形字蛇野	縄文・奈良・平安・中世	8・10
1-220	柳沢	秋田市広面字柳沢	縄文	2・3・6・8・10
1-221	桜田邸内	秋田市広面字赤沼	縄文	8・10
1-228	一ノ坪条里制遺構	秋田市保戸野八丁	奈良・平安	1・8・10
1-229	万圓山天徳寺	秋田市泉三嶽根	近世(県指定文化財)	6・8・10
1-230	如斯亭	秋田市旭川南町	近世(県指定文化財)	8・10
1-251	中山台	秋田市新藤田字中山台	奈良・平安	8・10

第1表 周辺遺跡一覧

山崎館(189)が、密な状態で構築されている。

近世では、秋田藩主佐竹氏の居城として、慶長8(1603)年から同9年にかけて築城された久保田城(217)がある。同城跡は昭和63年に本丸の一角が、平成3～4年には二の丸の一角がそれぞれ現状変更に伴い発掘調査されている。また、秋田県指定文化財である万回山天徳寺(229)や如斯亭(230)の他、国指定史跡の平田篤胤墓(218)もある。

註1. 経済企画庁『土地分類基本調査 地形・表層・土じょう 秋田』1966(昭和41年)

参考文献

1. 虎尾俊哉「秋田市北郊の条理制遺構・条理制施行の北限設定の試み」『日本上古史研究4巻3号』1960(昭和35年)
2. 杉浦 馨「柳沢遺跡の表面採集品について」『秋田考古学 27』秋田考古学協会 1968(昭和43年)
3. 高塚泰時「秋田市柳沢発見の住居跡」『月刊 考古学ジャーナル 9』No.99 ニュー・サイエンス社 1974(昭和49年)
4. 秋田考古学協会『手形山遺跡』1975(昭和50年)
5. 新人物往来社『日本城郭体系第2巻 青森・岩手・秋田』1980(昭和55年)
6. 秋田魁新報社『秋田大百科事典』1981(昭和56年)
7. 秋田県教育委員会『秋田県の中世城館』秋田県文化財調査報告書第86集 1981(昭和56年)
8. 秋田市教育委員会『秋田県秋田市遺跡詳細分布調査報告書』1989(平成元年)
9. 秋田市教育委員会『久保田城一本丸御隔繪跡発掘調査報告書-』1989(平成元年)
10. 秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図(中央版)』1990(平成2年)
11. 秋田市教育委員会『久保田城-佐竹資料館増築に伴う二の丸発掘調査報告書-』1992(平成4年)
12. 秋田県教育委員会『秋田・昭和線地方道改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ-大松沢Ⅰ遺跡-』秋田県文化財調査報告書第249集 1994(平成6年)
13. 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第259集 1995(平成7年)

第3章 発掘調査の概要

第1節 遺跡の概観

蟹子沢遺跡は既述のごとく、東西を旭川に注ぐ沢水によって開析され、南西を向く舌状の地形を呈する段丘の先端部に立地している。標高は37～46mである。この遺跡の範囲は、北東－南西(長軸方向)450m、北西－南東(短軸方向)60～150mと推定される。このうち、工事区域にかかり、調査対象区となった箇所は遺跡の北東端部(面積7,000㎡)である。

調査区は、南北に走る市道によって東西に分断されている。西側調査区は土地造成が行われ区画整理された標高約46mの平坦地である。その西側は急峻な斜面となっており、下方の狭小な谷底平野(旭川低地)に作られた水田地帯(標高19m)に繋がっている。東側調査区は土地造成された標高40m～46mの平坦地と、東・南東斜面および南東斜面下の標高32mで小さな平坦地である。その南東側は緩斜面から小さな平場を経て、また緩斜面に移行して旭川流域の水田(標高16m)に続いており、東斜面下は主要地方道秋田・昭和線の路肩に至る。現況は、西側調査区が公道と私道に囲まれた畑地(同区西端部)と萱などの雑草が生える更地、東側調査区が移転の完了していない家屋がある宅地と、畑地、山林である(第5・6図)。

調査区の基本土層は、過去の土地造成により改変されており、第Ⅱ～Ⅳ層が欠如し盛土された部分が大半を占めるが、50ラインに設けた東西トレンチの南壁土層などから、以下の通り観察できた(第7図参照)。なお、西側調査区では、層厚10～60cmの盛土層(第Ⅰ層)のみである。

第Ⅰ層 暗褐色土(10YR3/3)～黒褐色土(10YR2/3)：しまりの強いシルト質の盛土および耕作土の表土層である。層厚は平坦部で10～60cm、斜面の一部と南東斜面下で50～180cmである。

第Ⅱ層 暗褐色土(10YR3/3)：しまりの強いシルト質土で、遺物包含層である。東側地区中央部より北側や宅地周辺、斜面の一部では削平を受けて欠如している。層厚は0～25cmである。

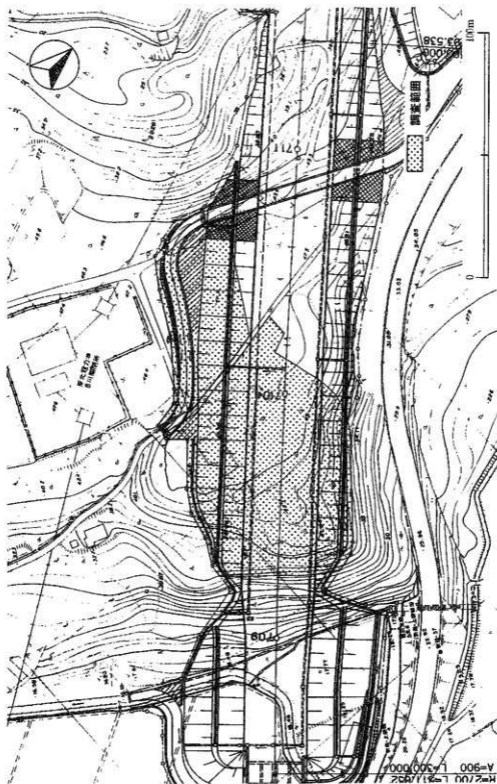
第Ⅲ層 黒褐色土(10YR2/2)：しまりの強いシルト質土で、層上位には土器片、石器、剥片など遺物を若干含んでいる。部分的にしか堆積しておらず、本調査区ではMD50～MF50の沢の落ち込み部分や斜面部分で認められる。層厚は0～25cmである。

第Ⅳ層 褐色土(10YR4/4)：第Ⅴ層の漸移層である。しまりの強いシルト質土を主体とするが、調査区中央より南東方向に下る斜面の上位付近から、拳大～人頭大の礫混じりの層となっている。層厚は0～15cmである。

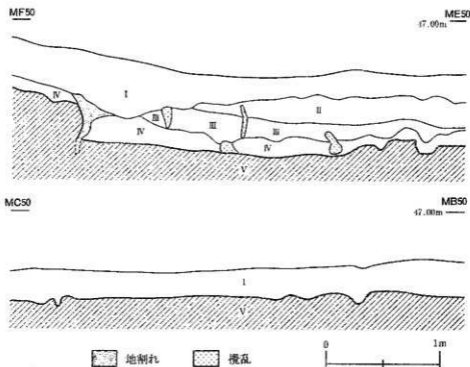
第Ⅴ層 黄褐色土(10YR5/6)～明黄褐色土(10YR6/6)：地山上でしまりの強い粘質土を主とするが、砂礫混じりの浅黄褐色土(10YR8/4)となっている部分もある。



第5図 遺跡周辺地形図



第6図 工事計画と調査範囲



第7図 調査区の基本層位

第2節 調査の方法

発掘調査はグリッド法を用いた。調査区に設置されている東北横断自動車道秋田線建設の道路中心杭(S T A710+00)をグリッド原点MA50として、この杭から磁北に合わせた南北基線とこれに直交する東西基線を設け、 4×4 mのグリッドを設定した。また、南北基線には2桁の算用数字、東西基線にはアルファベット2文字の組み合わせを付し、各グリッドの名称は南東隅の交点の算用数字とアルファベットを組み合わせで呼称した。道構等の実測は、各グリッド杭を利用して測量し、縮尺は原則として20分の1としたが、土器埋設遺構は10分の1とした。なお、これらの道構平面図と調査範囲図等から道構配置図など必要な図面を作成した。

第3節 調査の経過

5月11日、発掘調査に先立って、環境整備を行った。12日、前年度未買収のため範囲確認調査ができなかった西側地区(2,000㎡)の北辺より調査を開始した。18日まで上坑など6基を検出したが、これらはすべて現代の攪乱穴と判明し欠番とした。25F1、50ラインを境とした北側

半分の調査を終えた。31日、西側調査区の調査を終了した。その結果、同区は全域にわたって地山を削平して土地造成されており、遺構・遺物はすでに失われていた。

5月30日、西側調査区の調査終了と前後して、東側調査区(5,000㎡)の北西部から調査を開始した。なお、道路建設路線内の居住者の移転先が、蟹子沢遺跡の一部にあたる東側調査区外の南側隣接地であるため、6月1日～29日にかけて秋田市教育委員会が、その部分の発掘調査を実施した。

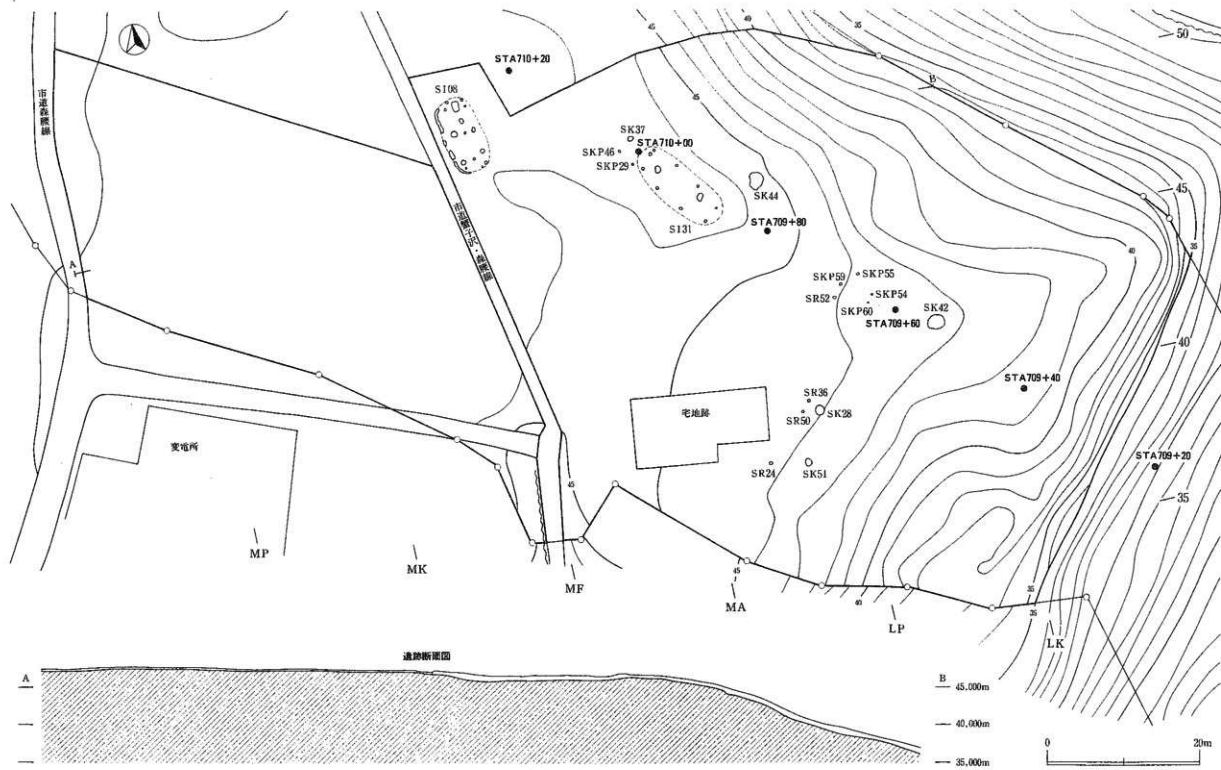
6月1日、調査区内から北側排土場所まで、ベルトコンベアーを設置した。6日、ME51グリッドから南東にかけて、沢状の落ち込みを検出した。9日、主要土層観察用ベルトの土層図を作成した。また、沢状の落ち込みは自然地形と判明した。10日、沢状の落ち込みにかかる第Ⅱ層中から縄文土器片などが多量に出土したが、他の地区では僅少であった。24日、土坑2基を検出した。27日、調査区内に残されていた家屋の解体が始まった(7月2日に解体終了)。

7月1日、土坑2基、柱穴椽ビット4基を検出した。本日より検出遺構の調査を開始した。4日、調査区外北側に設定した排土置き場が限界になり、斜面下の道路に崩れる恐れが出てきたので、西側調査終了区を排土置き場とした。また、解体された家屋部分は、地山が1mも削平されていることが判明したため、当該部分の調査は終了とした。26日まで、土坑2基、土器埋設遺構2基、柱穴椽ビット11基を検出した。7月下旬から8月上旬にかけて連日の猛暑のため乾きがひどく、粗掘終了地区の精査を散水しながら行った。

8月5日、土坑1基を検出。23日、お盆休み明け初日、相変わらずの猛暑で作業効率が悪い。翌24日、柱穴椽ビットを2基検出。30日まで、焼土遺構と土坑を各1基検出した。また、午前中に雷雨となり作業を一時中断した直後、調査区に隣接する変電所に落雷。当方に被害なし。

9月2日、ようやくまとまった雨が降り、第Ⅴ層面の精査も進み、大型の土坑(SK44)1基を検出した。16日、粗掘を終了し、以後、精査に全勢力を傾ける。また、29日までに焼土遺構1基、柱穴椽ビット8基、土器埋設遺構2基、土坑2基の計13遺構を検出した。ここまでの調査で、L S47からL T49グリッドにかけて検出された柱穴椽ビットと焼土遺構は、竪穴住居跡(SI31)を構成する遺構と判明したため、柱穴と地床石に改めて、その遺構番号を欠番とした。30日、台風26号の影響で風雨が強くなり作業ができず、午後の作業を中止した。

10月3日、午前中は航空写真撮影のための遺跡内外の整理とその撮影。午後からは遺構調査など通常の作業を行った。5日、北西端部で竪穴住居跡の壁溝が検出されたため、同部で先に検出された土坑や柱穴椽ビットおよび焼土遺構などは、竪穴住居跡(SI08)の柱穴と地床石に改め、その遺構番号を欠番とした。6日、全検出遺構の調査と発掘後の調査区全景の写真撮影を終えた。7日、原因者に遺跡の調査終了を報告して引き渡した。その後、発掘器材を秋田県埋蔵文化財センターに搬送して、蟹子沢遺跡の発掘調査を終了した。



第8図 遺構配置図

第4章 調査の記録

本調査で検出された遺構は、竪穴住居跡2軒、土坑6基、土器埋設遺構4基、柱穴椽ビット6基の計18遺構である。遺構はすべて東側調査区の同区北西部から南東部にかけて検出された。遺物は、主に調査区北西部の第Ⅱ層と東部斜面の第Ⅰ・Ⅱ層から出土した。

第1節 検出遺構と遺物

1. 竪穴住居跡

調査対象区が土地造成によって第Ⅴ層の地山面まで削平されており、検出できた2軒の竪穴住居跡の壁は削られ、床面の広がりも明瞭に把握することができなかった。このため、その全体プランは地山面に残された柱穴などから推定したものである。なお、竪穴住居跡に付属する柱穴と地床炉などを検出当初は単一の遺構として、検出順に遺構番号を付していたが、調査によって住居跡に伴うものと判断された段階で、一遺構の番号を竪穴住居跡にあたえ、他の遺構番号を欠番とした。

また、各竪穴住居跡の柱穴覆土から炭化物(材)を採取して、その年代測定(¹⁴C)と構築材の樹種同定を行った。分析結果は、第5章の第1節に掲載した。

SI08(第9図、図版6)

調査区北西端部のME50～53、MF50～53、MG50～53グリッドにあり、第Ⅴ層上面で相対する柱穴椽ビット群とビット群に囲まれた中に焼土遺構(地床炉)が検出され、さらに外側に壁溝が検出されたことから住居跡と判断した。また、第Ⅱ・Ⅲ層中で壁面は確認できなかったが、本来の掘り込み面は、少なくとも第Ⅲ層よりも上面であると考えられる。なお、地床炉付近から北側部分は平らで堅く床面と推定されるが、これより南東側は地盤沈下によって沢状の落ち込みとなっており、一段低くなっていた。

住居跡の平面形は、検出された壁溝や13個の柱穴の配置(Pit1～13)から、長軸(南北)10.1m×短軸(東西)5.7mの長楕円形を呈するものと推定される。壁は削平されており確認できなかった。柱穴の覆土の土色は大半が黒褐色を呈し、うち4個(Pit4・5・6・7)では柱痕跡が認められた。これらの柱痕跡も黒褐色を呈するが、他の土粒の混入量が少なく、単色に近いことから容易にその痕跡を把握できた。なお、Pit12・13(第10図、図版6)は市道東縁に沿って植えられていた松の根を抜き除去した段階で確認され、当初土坑として扱ったが、その後の

調査でS I 08の柱穴と判断された。二つのピットは他の柱穴に比べて大きく、覆土は人為的であり、この土中には縄文土器片や剥片が混在していた。各柱穴の規模は第2表に記載した。

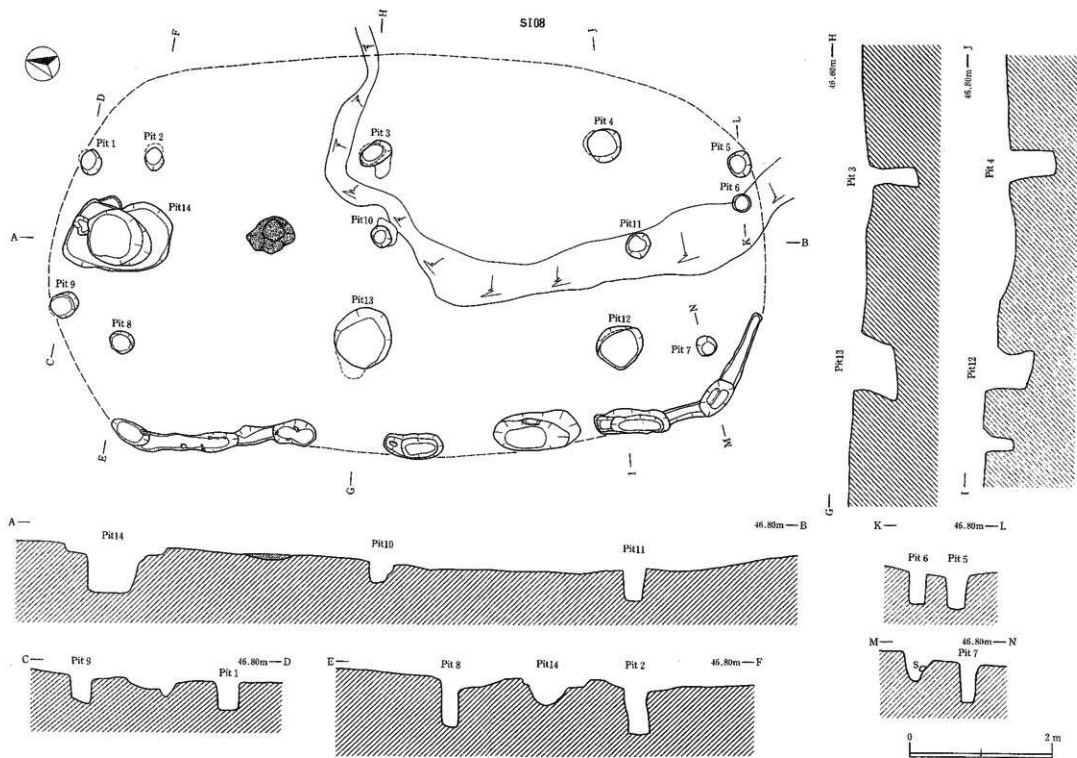
炉は、住居跡長軸線の中央から北側寄りに1カ所確認された。平面形は長軸(北西-南東)66cm×短軸(北東-南西)50cmのほぼ楕円形を呈し、床面から16cmほど掘り込んだ地床炉(第10図、図版6)である。また、住居跡の長軸線の北端には、住居跡の付属施設である土坑(Pit14(第10図、図版6))が掘り込まれている。この土坑の平面形は長軸(北東-南西)1.56m×短軸(北西-南東)1.08mの楕円形を呈している。深さは63cmである。底面は平坦で、壁は急傾斜で立ち上がり、南側を除きオーバーハングしている。覆土の上位から下位にかけて縄文土器片と石器や剥片などが混在していることから、人為的に埋め戻されたものと判断した。

遺物は、住居跡の柱穴や土坑(Pit14)の覆土中から、縄文土器片(第17図1~15・18図16~20)や石器(第22図S1~7)および剥片などが多量に出土した。

出土した土器は、すべて深鉢形土器の破片であり、器面の磨滅で文様が判然としないものが大半であった。1は口縁部から体部上半部である。やや外反する口縁部には、数条の単軸絡条体の側面圧痕を横位に施している。頸部にはR原体の側面圧痕のある隆帯が口縁と平行に1条施されている。体部にはRとRL原体(非結束)による羽状縄文が縦位に施され、羽状縄文間に縦位の綾絡文がみられる。2は体部片で縄文(原体不明)が施されている。3~6は口縁部片である。いずれの施文原体は不明であるが、3には絡条体の側面圧痕、4には縄文原体の側面圧痕がわずかに認められる。6の口縁部の外面には煤状炭化物が付着している。7は体部上半の破片である。上方には、口縁部との境を隔す低い隆帯が走り、LR原体の側面圧痕が施されている。体部にはLR縄文と2条平行1単位の綾絡文が施文されている。胎土には繊維や砂礫を多く含み、非常に軽い土器である。8・9・12・13・17・18は体部破片で、10は底辺部の破片、

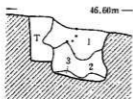
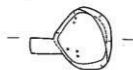
Pit 番号	規 模			底面の 標 高	出 土 遺 物
	長 軸(方位)	短 軸(方位)	深 さ		
1	36cm(東-西)	29cm(南-北)	36cm	46.11m	縄文土器片1点・剥片3点
2	44cm(北西-南東)	26cm(北東-南西)	54cm	45.95m	石器1点
3	46cm(北西-南東)	29cm(北東-南西)	65cm	45.55m	縄文土器片13点・剥片1点
4	48cm(東-西)	47cm(南-北)	64cm	45.57m	縄文土器片8点
5	36cm(北東-南西)	32cm(北西-南東)	46cm	45.64m	石器1点・剥片1点
6	26cm(北東-南西)	25cm(北西-南東)	42cm	45.69m	なし
7	28cm(北東-南西)	26cm(北西-南東)	54cm	45.95m	なし
8	36cm(南-北)	32cm(東-西)	60cm	45.88m	なし
9	40cm(北西-南東)	34cm(北東-南西)	36cm	46.19m	石器1点
10	30cm(北東-南西)	26cm(北西-南東)	30cm	46.19m	縄文土器片6点
11	36cm(北西-南東)	32cm(北東-南西)	46cm	45.75m	縄文土器片1点
12	66cm(北西-南東)	60cm(北東-南西)	53cm	45.86m	縄文土器片7点・剥片6点
13	85cm(北西-南東)	79cm(北東-南西)	61cm	45.85m	縄文土器片30点・石器2点・剥片10点
14	156cm(北東-南西)	108cm(北西-南東)	63cm	45.82m	縄文土器片10点・石器2点・剥片14点

第2表 S I 08 Pit 計測一覧



第9圖 S108

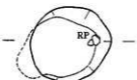
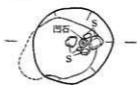
SI08 Pit12



1. 黒褐色土(10YR2/2)
2. 暗褐色土(10YR3/3)と黄褐色土(10YR5/6)の混合土
3. にぶい黄褐色土(10YR7/3)
- T. 土層観察用トレンチ

- : RP
- ▲ : RQ
- : F

SI08 Pit13

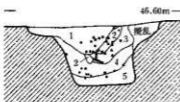


SI08 Pit13



1. 暗褐色土 (10YR3/3)
2. 暗褐色土 (10YR3/3)
3. 黒褐色土 (10YR2/3)
4. 黄褐色土 (10YR5/6)
5. にぶい黄褐色土(10YR5/3)
6. 明黄褐色土 (10YR6/6)
7. 黄褐色土 (10YR5/6)
8. 明黄褐色土 (10YR6/6)

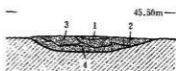
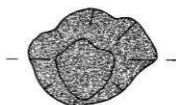
SI08 Pit14



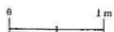
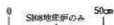
1. 暗褐色土(10YR3/3)
2. 黄褐色土(10YR5/6)
3. 暗褐色土(10YR3/3)
4. 黒褐色土(10YR2/3)
5. 暗褐色土(10YR3/3)

Aは第18図16

SI08地床炉



1. 明赤褐色土(5YR5/8)
2. 赤褐色土 (5YR4/6)
3. にぶい赤褐色土(5YR4/4)
4. 明赤褐色土 (5YR5/6)



第10図 SI08Pit12・13・14と地床炉

11・14・15は口縁部破片である。いずれも器面が磨滅しているため施文原体などは不明であるが、8には平行沈線が縦位に施され、9には縄文が施文されている。また、11には絡条体の側面圧痕と縄文原体の側面圧痕を横位に施している。12には横位に巡る隆帯に瘤状の突起を付し、そこから隆帯が垂下している。隆帯上には小さな円形の刺突文が施されている。13には撚糸文が縦位に施文され、外面には煤状炭化物が付着している。12・13は胎土に繊維を含み軽い土器である。14と15は同一個体であり、2条1単位の平行沈線による方形区画文が認められる。16は外反する山形の口縁をもつ体部上半の破片である。山形頂部から下方の橋状把手まで垂下する隆帯によって二分されている。口縁部文様帯には絡条体の側面圧痕が山形の口縁とこの頂部から垂下する隆帯などに沿って施文されている。体部にはLR縄文が施されている。また、口縁と体部の一部外面には煤状炭化物が付着している。17には縄文、18には縦位に施文された数条の綾絡文が認められる。19は波状を呈しやや外反する口縁部をもつ体部上半の破片である。波状口縁の頂下にはボタン状の貼付が付される。口縁部には絡条体の側面圧痕が施されているが、他の部位の文様は磨滅が激しく不明である。20は体部破片であるが、文様構成等から1と同一個体であろう。

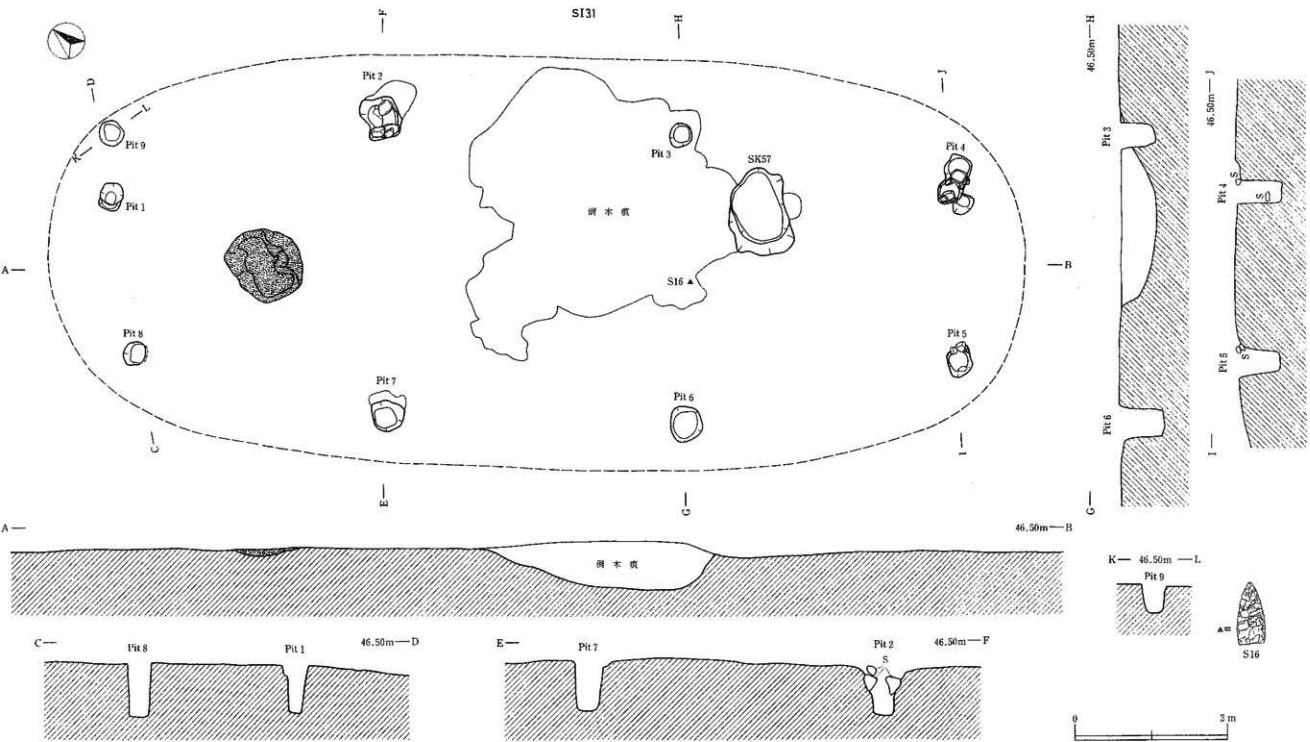
S1～3は石鏃で、基部に抉りのある凹基無蓋鏃である。S1・2はかなり透過性のある黒曜石を素材とし、両面全体に押し剥離が施されている。S3は両面の縁辺部にのみ押し剥離が施されており、素材の剥離面を残している。また、基部の一端を欠損している。S4は石槍である。体部中央と基部の片側が抉れ、左右は対称ではない。二次加工は両面の全面におよんでいる。S5は一端を欠いた剥片石器である。両面に二次加工が施されており、端部は丸みを帯びている。また、端部から破断部にかけて器幅が狭くなることから、欠損部位は尖っていたと推測され、石錐の錐部あるいは石鏃の尖頭部等の可能性がある。S6はスクレイパーである。大きめの剥片の末端と片側縁に刃部を作出している。末端は抉れて弧状を呈している。S7は凹石と磨石の両機能を有する蹠石器である。凹蹠の片面に敲打による凹みがあり、もう一方の面は磨られている。

また、Pit12から剥片6点(長さ2.1cm～5.3cm)、Pit13から剥片10点(長さ1.4cm～3.2cm)、Pit14から剥片14点(長さ0.9cm～3.7cm)が出土した。

本住居跡は、出土した土器片から縄文時代前期末葉～中期前葉にかけての時期に帰属するものと判断される。

SI31(第11図、図版7)

調査区中央部北側のLR47～48、LS47～49、LT47～49、MA48～49グリッドにあり、本住居跡もSI08と同様に、第V層上面で相対する柱穴様ビットや、これらに囲まれた中に焼土遺構が検出されたことなどから住居跡と判断した。なお、木の根によって擾乱されている箇所



第11圖 S131

が多く、特に中央部には大きな倒木痕があり、床面は著しく擾乱を受けている。また、推定プラン内の東側床面は土坑(SK57)に切られている。

住居跡の平面形は、検出された柱穴9個の位置関係(Pit1～9)から長楕円形を呈するものと推察され、その規模は長軸(北西-南東)12.9m×短軸(北東-南西)5.4mと推定される。壁は、削平が地山面までおよんでいたので掘りだすことができなかった。検出された柱穴の覆土の土色は、全て暗褐色を呈し、うち3個(Pit2・7・8)の柱穴では柱痕跡が認められた。柱痕跡部分の土は、掘り方の埋め土よりしまりが弱くボソボソしていたため容易にその痕跡を確認することができた。また、Pit2・4・5の3個の柱穴では、柱の根固めに使用された石が確認された。Pit2では人頭大の石が北側に2個、東西側に1個ずつ柱を挟むように埋められており、東側の石には被熱痕が認められた。Pit4では人頭大の石1個と拳大の石4個で、主に東側に埋められていた。Pit5では人頭大の石2個と拳大の石2個が、主に北東側に埋められていた。各柱穴の規模は第3表に記載した。

炉は、住居跡長軸線上の北西側に1カ所確認された。炉の中央部を木の根によって擾乱されていたが、平面形は長軸(北東-南西)98cm×短軸(北西-南東)90cmの楕円形を呈し、床面(確認面)から26cm掘り込んだ地床炉(第12図)である。

遺物は、柱穴の覆土中から石器(第22図S8～11、第23図S12・13)および剥片などが少量出土したが、土器は出土しなかった。

S8～10は尖基の石鏃である。両面に押圧剝離が施されているが、片面の一部に素材の剝離面が残っている。S11・12はスクレイパーである。S11は両側縁と端部に刃部を作出し、片面に素材の剝離面が残っている。S12は側縁に刃部を作出しており、端部は突出している。両面に素材の剝離面を大きく残している。S13は磨石で、片面が平滑な磨面となっている。

これらの遺物から木造構は、縄文時代に構築されたものであると判断できるが、その帰属時期については、決定資料が出土せず明確にできなかった。

また、この住居跡を壊している倒木痕から石鏃3点、横型石匙1点、石槍の尖頭部片1点が

Pit 番号	規 模			底面の 標 高	出 土 遺 物
	長 軸(方位)	短 軸(方位)	深 さ		
1	36cm(北東-南西)	28cm(北西-南東)	62cm	45.62m	剥片1点
2	55cm(北東-南西)	50cm(北西-南東)	66cm	45.49m	縄文土器片35点・石器1点・剥片10点
3	34cm(北東-南西)	30cm(北西-南東)	34cm	45.68m	石器1点
4	42cm(東-西)	32cm(南-北)	57cm	45.55m	縄文土器片3点・剥片3点
5	48cm(北東-南西)	36cm(北西-南東)	52cm	45.50m	石器2点・剥片3点
6	47cm(北東-南西)	40cm(北西-南東)	57cm	45.56m	石器1点・剥片1点
7	45cm(南-北)	40cm(東-西)	64cm	45.61m	なし
8	33cm(北東-南西)	32cm(北西-南東)	70cm	45.54m	なし
9	35cm(北東-南西)	31cm(北西-南東)	34cm	45.84m	石器1点・剥片49点

第3表 SI31Pit計測一覧

出土したが、これらの石器をS I 31に伴うものと積極的に判断できないため、遺構外の出土遺物として取り扱った。なお、石槍の尖頭部は、S K 37より出土した石槍の基部と接合したので、その出土地点を第11図に示した。

2. 土坑

土坑は調査区北東部と南東部で検出したが、その分布状況からは、特に集中していると判断できなかった。

検出された土坑のうち、S K 37・44・57の覆土からは炭化物を採取し、その構築時期や遺跡周辺の植生に関する資料を得るため、年代測定(^{14}C)と樹種同定を行った。なお、S K 44では樹種同定だけを行った。分析結果は、第5章の第1節に掲載した。

S K 28(第13図、図版 8)

南東斜面の上端にほど近いL P・L Q 40グリッドにあり、第V層上面で検出した。平面形は長軸(南-北)1.33m×短軸(東-西)1.19mの楕円形を呈し、検出面から底面までの深さは47cmである。底面は東から西へわずかに傾いており、壁は急な傾斜で立ち上がっている。覆土は5層に分けられた。全体にかたくしまっており、炭化物・地山粒子、小礫、土器細片を混在している。特に3層には地山土の混入が多い。また、土坑中央部の2層から4層にかけて、最大22×10cmの円礫から最小5cm大の円礫などが10個重なりあって混入している。すべて投棄されたものであろう。このことから本土坑は、人為的に埋め戻しが行われたものと判断される。

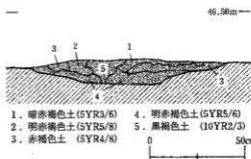
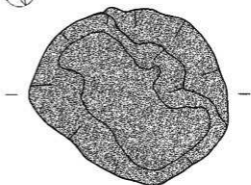
出土遺物は、縄文土器片4点と上記の自然礫10個である。第19図21は深鉢形土器の底辺部の破片である。体部には原体が判然としないが縄文が施されており、底は若干上げ底である。他の土器は図化できなかった。礫10個に加工や被熱痕は認められなかった。

S K 37(第13図、図版 8)

MA 50グリッドにあり、第V層上面で検出した。本土坑はS I 31の北側に位置している。平面形は長軸(北東-南西)1m×短軸(北西-南東)0.72mの不整な楕円形を呈し、検出面から底面までの深さは27cmである。底面は中央部が幾らか窪んでいる。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は6層に分けられた。1～3層には炭化物と明赤褐色の焼土や地山土粒子が混入し



S I 31地床炉



第12図 S I 31地床炉

ているが、3層には1・2層よりも混入が多い。4層には褐色土粒子・小ブロックや黒褐色土および地山土粒子が多量に混入している。5層には地山土粒子などが若干混入し、6層には地山土粒子が多量に混入している。全層ともかたくしまっており、覆土の上位から下位にかけて石器と剥片、砕片が多量に混入している。また、焼土粒も混入しているが、本土坑内に焼き火痕などは見られず、焼土や石器などは本土坑に投棄されたものと判断される。

遺物は、石器5点(第23図S14~18)と剥片および砕片が1,258点出土した。S14・15は尖基の石鏃である。両面全体に押し剥離が施され、断面形は凸レンズ状を呈する。また、S14は全体に薄く仕上げられている。S16は石槍である。本土坑からはS16の基部が出土し、S131の倒木痕から出土した尖頭部と接合できた。柳葉形を呈し、両面の全面に二次加工が施され、断面形は凸レンズ状を呈しており、基部は丸みを帯びている。S17は基部を欠いた石筈で、両側縁がほぼ平行する短冊形を呈する。主に背面を二次加工しており、主要剥離面には二次加工は少ない。刃部は素材とした剥片の打面側に作出され、その刃部は直刃の片刃である。S18は一端を欠損した剥片石器である。残存部の両面全面に二次加工しており、断面形は凸レンズ状を呈する。

SK42(第14図、図版8)

L42グリッドにあり、第V層上面で検出した。この地区は東向きに舌状を呈する張り出し部に位置しており、地山に含まれた小礫がまばらに露出している箇所である。本土坑はこうした礫混じりの第V層を掘り込んで構築されていた。平面形は長軸(北東-南西)2.14m×短軸(北西-南東)1.93mの楕円形を呈し、検出面から底面までの深さは1.1m~1.2mである。底面は西側に傾いており、小礫が露出して部分的にでこぼこしている。壁には拳大の礫が多く露出し、底面よりもさらにでこぼこしている。なお、土坑の断面形は、上部が摺鉢形、下部が筒形で、全体として盃の様な形を呈している。覆土は7層に分けられた。1・2層は小礫が少量混入するが、他に混入物はなくかたくしまっている。3層は小礫と地山粒子が少量混入し、1・2層よりしまりのない層である。4~7層はしまりの弱い層である。4層は小礫少量と地山粒子を多量に混入し、5層は地山粒子を少量混入するが、礫はほとんど混入しない。6・7層は拳大の礫、地山の粒子と小ブロックを多く混入している。また、6・7層に混入している礫は、壁面に露出した礫が落ち込んだものであり、全層とも自然営力により堆積したものと判断される。

SK44(第14図、図版9)

東斜面先端部のLQ47・48グリッドにあり、第V層上面で検出した。平面形は長軸(北東-南西)2.26m×短軸(北西-南東)1.87mの楕円形を呈し、確認面から底面までの深さは1.42mである。底面は南西側へ幾らか傾いており、壁は急傾斜で立ち上がっている。覆土は12層に分けられ、全層ともかたくしまっている。1・2層は、黒褐色土で、礫、炭化物、黒色土が混入

しているが、1層の方が黒色土の混入割合が多い。3層は砂質の層である。4層は褐色土で砂礫が混入し、黒色土がブロック状に混入する。5～12層は砂質で、暗褐色土・にぶい黄褐色土・灰黄褐色土が互層に入り込む。暗褐色土には小礫が混入しているが、その割合は底面に近いほど多くなる。最下層の12層のにぶい黄褐色土にも、径3～5cmの礫が30%混入している。5～12層は壁面の崩落土と自然堆積が、1～4層は自然堆積が行われた結果と考えられる。

遺物は2層から縄文土器1点(第19図22)、底面から剥片が13点出土した。22は膨らみのある体部に、短くてわずかに外反する口縁部が付く小型の壺形土器である。底は平底である。口縁部は無文で、頸部には沈線が1条走り、体部にはRL縄文が施されている。口縁部を半分ほど欠損しているが、図上復元による口径は5.6cm、器高は8.1cm、底径は4.2cmである。剥片は最大が6cm×6cm、最小が5cm×4cmで板状を呈している。

SK51(第13図、図版9)

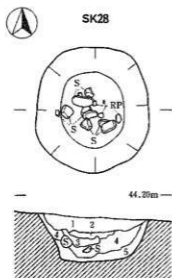
南東斜面上部のLQ38グリッドにあり、第V層上面で検出した。平面形は長軸(北西-南東)1.06m×短軸(北東-南西)0.76mの楕円形を呈し、確認面から底面までの深さ17cmである。底面は若干でこぼこがあり、南東側から北西側に緩やかに傾斜している。壁は南東側を除いて急傾斜で立ち上がっている。覆土は3層に分けられた。下位層ほどしまりがよい。1層は土器片と黄褐色土が少量混入している。2・3層には黄褐色土と褐色土の混合した層であるが、混合の割合によって分けられた。自然堆積土と判断される。

遺物は1層から縄文土器片が3点出土した。第19図23は深鉢形土器の体部破片で、LR縄文が施文されている。他の土器は磨滅著しく、文様は不明である。

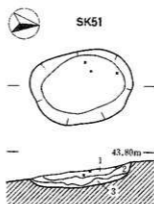
SK57(第13図、図版10)

LS47・48グリッドにあり、第V層面で検出した。本土坑はSI31プラン内の南東側に位置している。平面形は長軸(北東-南西)1.16m×短軸(北西-南東)0.77mの楕円形を呈し、確認面から底面までの深さは56cmである。底面はでこぼこがないが、北東側から南西側へ向かって幾分傾斜しており、壁は急傾斜で立ち上がっている。覆土は6層に分けられた。全層ともかたくしまっている。1層は焼土を少量混入している。2・3層は黄褐色土と暗褐色土を主体に明黄褐色土、灰白色土、炭化物、焼土が混入している。4層は、炭化物、焼土粒が混入している。5・6層は炭化物、焼土の混入はなく、にぶい黄褐色土、黄褐色土粒がまだら状に混入し、非常にしまりが強い層である。人為的埋土である。

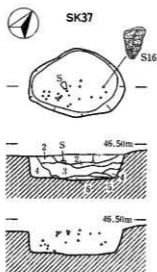
遺物は、縄文土器片2点と石器1点(第23図S19)や剥片2点が出土した。縄文土器は深鉢形土器の体部破片で、磨滅が著しく文様は不明である。S19は基部に丸みをもつ円基の石鏃である。



1. 暗褐色土(10YR2/2) 4. 黒褐色土(10YR2/3)
 2. 黒色土(10YR2/1) 5. 黒褐色土(10YR3/2)
 3. 黒褐色土(10YR3/1)

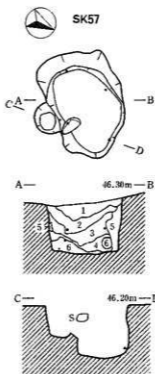


1. 黒褐色土(10YR3/3)
 2. 褐色土(10YR4/4)
 3. 黄褐色土(10YR5/6)

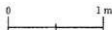


1. 暗褐色土(10YR3/3) 4. 黄褐色土(10YR5/6)
 2. 褐色土(10YR4/4) 5. 黒褐色土(10YR3/1)
 3. 暗褐色土(10YR3/3) 6. 黄褐色土(10YR5/6)

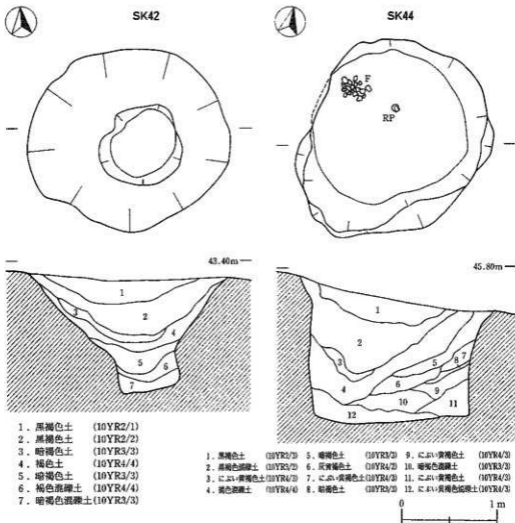
- : RP
 ▲ : RQ
 ● : F



1. 暗褐色土(10YR3/3) 4. 黒褐色土(10YR2/2)
 2. 黄褐色土(10YR5/6) 5. 黄褐色土(10YR5/6)
 3. 暗褐色土(10YR3/3) 6. によい黄褐色土(10YR7/3)



第13図 SK28・37・51・57



第14図 SK42・44

3. 土器埋設遺構

調査区東部中央から南部にかけて分布している。本遺構は埋設する土器に合わせ、あるいはそれより少し大きめの穴を掘り、それに土器を埋納したものである。

埋設土器の用途を知る手掛かりを得るため、SR24・36の両遺構内から土壌を、またその対照試料として周辺の土壌も採取し、リン・カルシウム分析を行った。分析結果は、第5章の第2節に掲載した。

SR24(第15図、図版10)

調査区南部のLR38・39グリッドにあり、第Ⅱ層上面で検出した。この付近の層位は、基本層位の第Ⅲ層を欠かし上から第Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ層となっており、このうち第Ⅰ層は宅地造成時

の盛土(黒褐色土(10YR2/3))で、その厚さはSR24が位置する箇所まで1mほどである。これは旧地形が市道周辺の平坦面から南東の急斜面へ移行する緩い傾斜面であったため、宅地造成の際に地山面近くまで削平した後、平坦面とはほぼ同じ高さまで盛土整地されたことに起因している。本遺構はこうした盛土を除去した段階で、円を描くように断続して立ち並ぶ土器片が認められ、南側を半載して観察した結果、土器埋設遺構であることが判明した。

宅地造成時に遺構上部が削平されており、本来の掘り込み面は不明である。検出面での土器埋設用の掘り方は、平面形が長軸(東-西)44cm×短軸(南-北)45cmの円形を呈し、検出面から底面までの深さは27cmである。底面は丸底であり、壁は東壁が緩やかに立ち上がるが、他の壁は急傾斜で立ち上がっている。土器は掘り方底面のほぼ中央部に正位に埋設されているが、造成時の土圧のためか東へやや傾いている。また、土器底部は掘り方の東壁下部に接している。

覆土は両層ともかたくしまっており、黄褐色土の微細な粒子を若干混入している。

埋設土器(第20図27、図版15)は、体部上半を欠損する深鉢形土器である。底はわずかに上げ底となっている。残存部の器高は32.9cm、底径は8.5cmである。外面にはLR縄文が横位に施文されている。また、内外面の一部に煤状炭化物が付着している。

SR36(第15図、図版10)

LQ40グリッドにあり、第V層上面で検出した。この周辺は宅地造成によって第V層面まで削平や攪乱が及んでいた。本遺構が位置する箇所の第I層(盛土)下位で、土器片が径60cmほどの範囲に点在していた。これらの土器片の地点を計測し、この部分を第V層面まで掘り下げたところ、上部を欠失した土器と、その周囲に掘り方と思われるプランが認められたので、南側を半載し、土器埋設遺構と判明した。

検出面での土器埋設用の掘り方は、平面形が長軸(北東-南西)48cm×短軸(北西-南東)43cmの楕円形を呈し、検出面から底面までの深さは18cmである。底面は幾らかでこぼこしている。壁はほぼ滑らかであり、北西壁がほぼ垂直に立ち上がっている他は緩い傾斜となっている。

土器は本来正位に埋められたものと思われるが、造成の際に西側からの圧力を受けたのか土器上部が壊され、土器自体も底部の一部を残して動き東側に傾いている。土器の底部は掘り方底面より5cm上方に位置している。覆土は両層ともややかたくしまっており、2層には黄褐色土粒子が少量混入している。

埋設土器(第20図28、図版15)は、体部上半を欠損する深鉢形土器である。残存部の器高は29.7cm、底径は15.4cmである。底はわずかに上げ底である。外面には結節のあるRL原体を縦位に施文しており、綾絡文が表出されている。外面の一部には煤状炭化物が付着している。

SR50(第15図、図版11)

SR36と同じLQ40グリッドにあり、第IV・V層面で検出した。第I層を除去して第IV層お

よび第V層面の精査中に、不明瞭ながら暗褐色を呈する小さな落ち込みに弧状を呈する土器片が認められた。東側を半截し、土器埋設遺構であることが判明した。SR36からは南へ約1m隔っているが、本遺構も造成によって下部まで削平されていた。

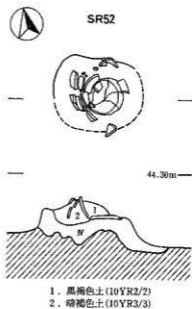
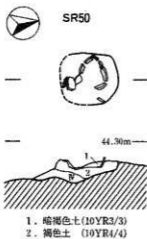
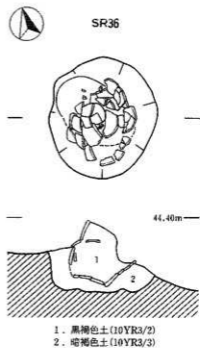
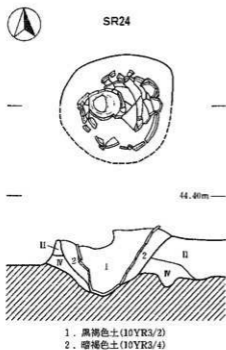
土器を埋設するための掘り方は、南東・南壁を失っていたが、平面形は現存する壁から23cm(南北)×20cm(東西)の隅丸方形を呈するものと推測される。検出面から底面までの深さは8cmとわずかであった。底面は中央部に向かって窪み、残存する壁はほぼ垂直である。この掘り方には、底部を欠く深鉢形土器が正位に埋められたと思われるが、著しく攪乱されたため、その体部下半の一部が馬蹄形に残存しているのみであった。土器は掘り方底面から4cm上方に位置している。覆土は、両層ともややかたくしまっており、1層には黄褐色土・褐色土粒子をまばらに少量混入し、2層には黄褐色上粒子をわずかに混入する。

埋設土器(第21図29、図版15)は、深鉢形土器の体部下半の破片である。残存する器高は10cmほどである。外面には原体が判然としないが羽状縄文が施文されている。内面の器上半には、煤状炭化物が付着している。

SR52(第15図、図版11)

L043グリッドにあり、第IV層中で検出した。この地区は東に向かって舌状に張り出す台地の基部にあたる。第IV層や第V層面まで削平が及んでおり、基本層位の第II・III層を欠落している。本遺構は層厚約30cmの第I層と木の根株を除去した際、深鉢形土器の底部から体部下半の破片と口縁部の破片が認められ、南側を半截した結果、土器埋設遺構と判明した。本遺構は宅地造成や木の根の攪乱を著しく受けていた。また、根株除去の際に周囲を掘り下げてしまい、本遺構が周囲より高くなってしまった。検出された掘り方は、木の根の攪乱によって東・南・南西壁を欠いており、その平面形は、推定長軸(北西-南東)36cm×短軸(北東-南西)30cmの橢円形を呈するものと思われる。検出面から底面までの深さは6~10cmである。底面は西側が一段低く丸底であるが、東側は平坦である。残存する壁は急傾斜している。また、この掘り方の掘り込みは第IV層中で終了し、第V層面まで達していなかった。残存する土器は正位に埋設されており、底部と西側下半が辛うじて埋設時の状態を保っていたものと思われる。土器底部は掘り方底面に密着していた。土器内の覆土には、黄褐色土の微細な粒子を若干混入し、掘り方内の覆土には、暗褐色上粒子を層全体にまだら状に少量混入していた。また、埋設土器の一部(体部破片)が混入していた。両層ともややかたくしまっている。

埋設土器(第21図31、図版15)は、口縁部と体部の半分ほどを欠いている深鉢形土器である。底は若干上げ底となっている。検出時には体部下半をかなり欠いていたが、L043グリッドの第I層中から出土した土器破片と接合できた。また、同一個体である頸部の一部(第21図30)も出土したが、これとは土器本体の磨滅や攪乱により散逸した部分が多く、接合できなかった。



第15圖 SR24・36・50・52

残存部の器高は24.5cm、底径は14.1cmである。外面には2本のLR原体による結束縄文と結節のあるLR原体が横位に施文されており、綾絡文が表出されている。また、煤状炭化物が部分的に付着している。

第21図30は接合できなかつた頭部の破片である。残存する器高は7cmである。1条の粘土紐貼付による隆帯が横位に施され、その上には縦位に刻み目がつけられている。この隆帯の上下には、LR縄文と綾絡文が施されている。外面に煤状炭化物が部分的に付着している。

4. 柱穴様ピット

6基検出されたが、検出地点がMA49・50グリッドとLO44・LN43・44グリッドの2つに分けられる。

SKP29(第16図)

MA49グリッドの第V層上面で検出した。平面形は長軸(北西-南東)36cm×短軸(北東-南西)29cmの楕円形を呈し、深さは26cmである。覆土は3層に分けられた。1・2層は柱痕跡である。1層は柱痕跡の上半であり、しまりが弱く黄褐色土が少量混入する。2層は柱痕跡の下半でしまりがあり、1層よりも黄褐色土の混入が多い。3層は褐色土がまばらに混入している。遺物は出土しなかった。

SKP46(第16図)

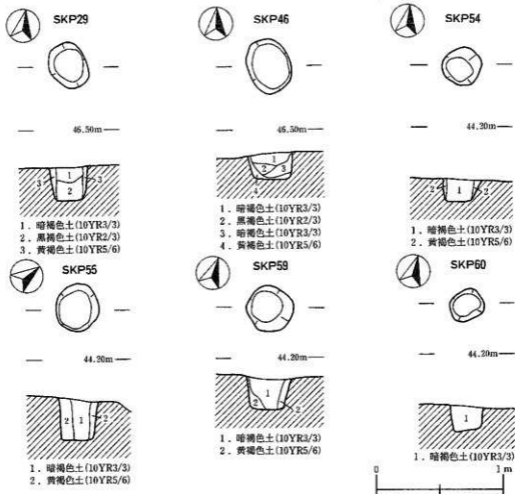
MA50グリッドの第V層上面で検出した。平面形は長軸(北西-南東)42cm×短軸(北東-南西)34cmの楕円形を呈し、深さは20cmである。覆土は4層に分けられた。明確な柱痕跡を確認できなかったが、1~3層が柱痕跡になる可能性がある。1層~3層には黄褐色土や暗褐色土が混入しており、その混入割合によって分けた。4層には褐色土がまばらに混入している。全体にしまりの弱い層である。遺物は出土しなかった。

SKP54(第16図、図版11)

LN43グリッドの第V層上面で検出した。平面形は直径30cmの円形を呈し、深さは17cmである。覆土は2層に分けられた。いずれもしまりがあり、1層は黄褐色土と炭化物が混入した柱痕跡である。2層には暗褐色土が混入している。遺物は出土しなかった。

SKP55(第16図、図版11)

LN44グリッドに第V層上面で検出した。平面形は直径36cmの円形を呈し、深さは33cmである。覆土は2層に分けられた。1層は黄褐色土と炭化物が混入した柱痕跡である。2層には暗褐色土が混入している。両層ともかたくしまっている。遺物は1層上位から出土した縄文土器破片2点(第19図25・26、図版14)である。25は波状口縁の深鉢形土器の破片である。外反する口縁部文様帯には横位に絡条体の側面圧痕と粘土貼付による突起を施している。頭部には絡



第16図 SKP29・46・54・55・59・60

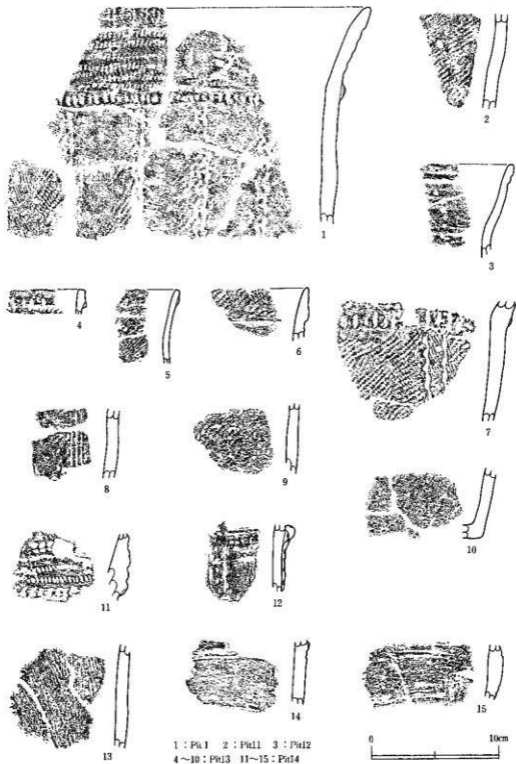
条体の側面圧痕を施した隆帯が巡る。体部にはLR縄文が施されている。26は平口縁の深鉢形土器の口縁部の破片で、LR縄文が施文されている。

SKP59(第16図、図版11)

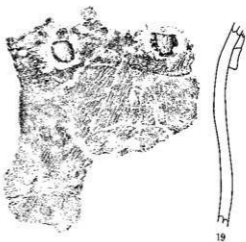
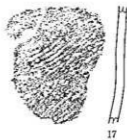
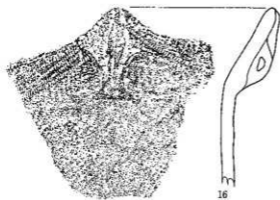
LO44グリッドの第V層上面で検出した。平面形は直径35cmの円形を呈し、深さは25cmである。覆土は2層に分けられた。両層ともしまりがあり、1層は暗褐色土に黄褐色土がまばらに混入した柱痕跡である。2層には暗褐色土が混入している。遺物は出土しなかった。

SKP60(第16図、図版11)

LN43グリッドの第V層上面で検出した。平面形は長軸(北東-南西)27cm×短軸(北西-南東)23cmの楕円形を呈し、深さは20cmである。覆土はしまりのある単一層で、黄褐色土が少量混入している。遺物は出土しなかった。



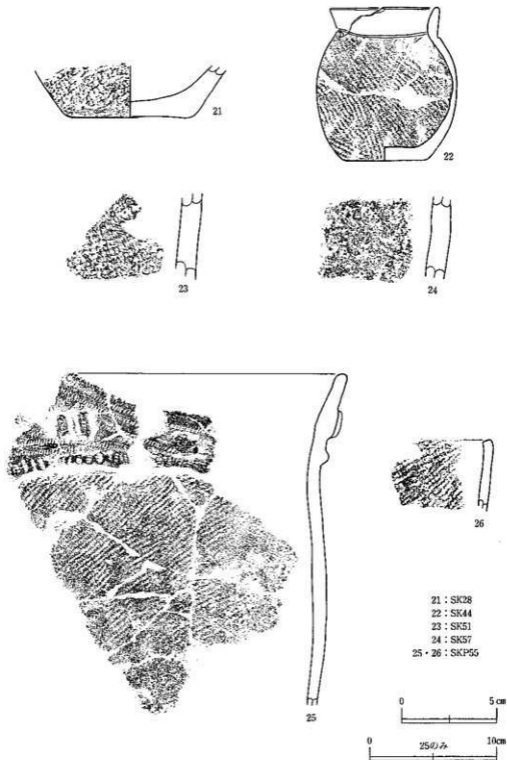
第17図 遺構内出土土器(1) [SI08]



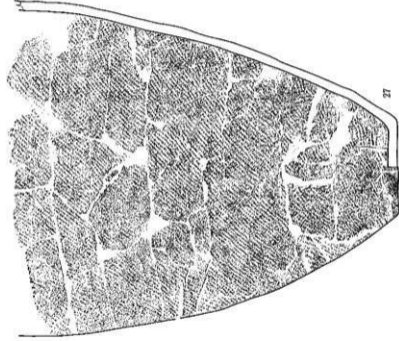
16~20 : Pit14



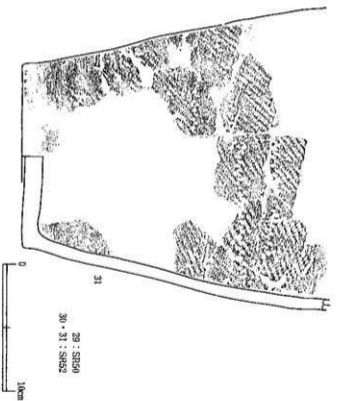
第18圖 遺構内出土土器(2) [S108]



第19図 遺構内出土土器(3)



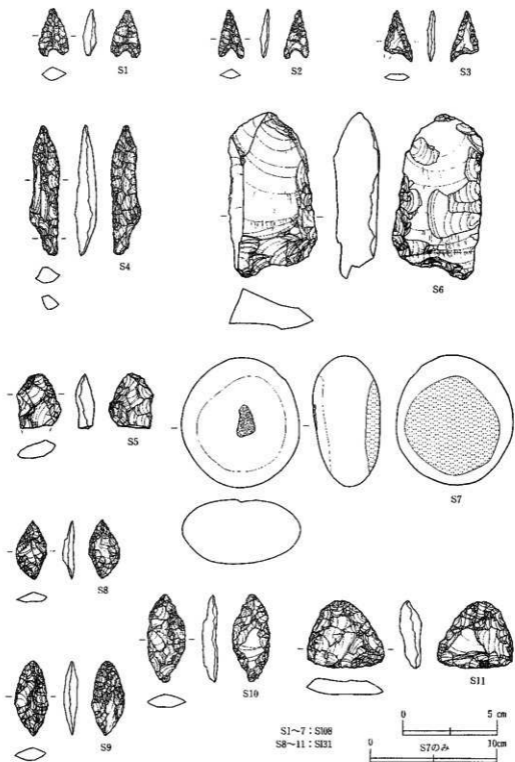
第20図 遺構内出土器(4)



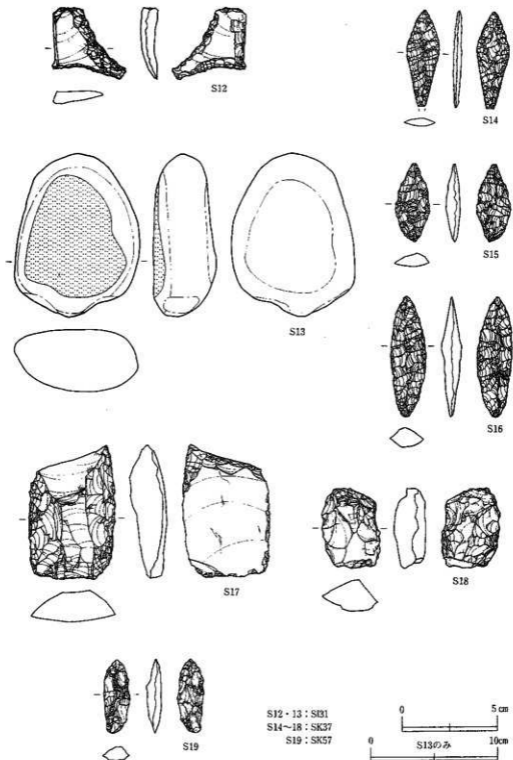
29 : SR50
30・31 : SR92

0 10cm

第21図 遺構内出土土器(5)



第22図 遺構内出土石器(1)



S12・13 : SK1
 S14~18 : SK37
 S19 : SK57

第23図 遺構内出土石器(2)

第2節 遺構外出土遺物

遺構外からは、縄文時代の土器と石器、弥生時代の土器、平安時代の土器などが、中コンテナ(規格54×34×10cm)で19箱分出土した。これらの土器資料は、ほとんど磨滅が著しく接合不可能な破片であり、完形に近い資料は平安時代の土師器1個のみであった。

1. 縄文時代の遺物

(1) 土器

出土した土器資料はすべて破片で、全体の形状を把握できるものはなかった。また、器面が磨滅して施文された縄文原体が判然としないものが多く、拓本に耐え得る資料も少なかったが、蟹子沢遺跡の時期を知る資料をできるだけ掲載した。土器資料の記述にあたっては、文様や胎土などから時期別にして第Ⅰ群から第Ⅲ群に分けて記載し、これに底部資料を加えた。

第Ⅰ群土器(第24図32～46、図版17)：縄文時代前期の土器である。すべて深鉢形土器の体部破片である。

32～38は木目状襷糸文が施された同一個体であり、L襷糸を横位に、39・40はR襷糸を縦位に施文している。41～44は同一個体で、R襷糸が縦位に施されたものである。45は羽状縄文(原体不明)、46はLR縄文(結束)が施されている。また、32～38、45・46の胎土には繊維が含まれ、36の外面と37の内面には植物(堅果類)圧痕がみられる。

第Ⅱ群土器(第25～30図、図版18～23)：帰属時期が前期末葉から中期前葉に属すると考えられる土器を一括した。

Ⅱa類：円筒土器である(第25・26図、図版18・19)。

47・48は口縁部に横位の羽状縄文を施し、頸部に半截竹管による爪形文が施された土器である。49～53は頭部の隆帯に半截竹管による爪形文が施された土器である。49の体部は縦位の木目状襷糸文である。50・51は器面が磨滅して文様不明である。52・53は同一個体であり、口唇部及び頸部に半截竹管による爪形文が、口縁部文様帯に絡条体の側面圧痕が施され、口唇部に2又に分岐した低い山形突起がある。54～59は口縁部文様帯に絡条体の側面圧痕が施され、頸部に絡条体の側面圧痕が縦位に等間隔に施された隆帯が巡る土器である。54・55の口縁部は少し内湾するが、56の口縁部は外反する。57・58は同一個体であり口唇部から頸部に隆帯が垂下する。59は絡条体の側面圧痕が施文された口縁部文様帯に突起が貼付されている。体部はやや膨らみLR縄文が横位に施される。胎土には砂粒を多く含み、焼成もあまり良くない。60～64は口唇部が2又に分岐した山形突起があり、口縁部文様帯に絡条体の側面圧痕や貼付された突起をもつ土器である。60・61は同一個体であり、山形突起は内湾している。山形突起の片側の口唇には粘土紐を貼付して膨陸させており、左右非対称形である。山形突起の下には槌状把手

が貼付され、頸部をやや隆起させて口縁部文様帯を区画している。頸部の隆起帯にも口縁部文様帯から続く絡条体の側面圧痕が施される。体部はやや膨らみRL縄文が縦位に施される。62は山形突起の口唇部を肥厚させて花卉状にし、中央部から隆帯を垂下させている。63・64は同一個体であり、山形突起の口唇に隆帯が貼付され口唇が丸みを帯びている。口唇部と頸部の隆帯には絡条体の側面圧痕が施され、口縁部文様帯には横位、斜位、縦位に絡条体の側面圧痕が施される。65は口縁部文様帯に絡条体の側面圧痕が横位に施され、口唇部と頸部の隆帯および貼付された突起にも絡条体の側面圧痕が施されている。66は65と同じ文様構成であるが、貼付された突起にRL原体の側面圧痕が施されている。67の口縁部文様帯には絡条体の側面圧痕が横位、斜位に施される。体部には縄文と縦位の綾絡文が施文されているが、磨滅が激しく原体は不明である。一部には鬚糸文も施されている。68～73は口縁部文様帯に縄文原体の側面圧痕を横位に施した土器である。68は頸部の隆帯にL原体、69は口唇部にL原体、70は口唇部にRL原体の側面圧痕が施されている。71は口唇部と頸部の隆帯にL原体の側面圧痕が施され、口縁部文様帯には横位に4条のL原体の側面圧痕を施した後で、口縁部の下半に縦位にL原体の側面圧痕が密に施される。体部にはLR縄文が施されている。72・73は口唇部と頸部の隆帯にRL原体の側面圧痕を施し、口縁部文様帯には絡条体の側面圧痕が口唇部隆帯の直下、頸部隆帯の直上及び中央部に横位に3条施される。72は絡条体の側面圧痕の間に縦位に、73は「C」字状にRL原体の側面圧痕が等間隔に施される。73の口縁部は波状を呈し、波頂下にリボン状を呈する貼付が施される。

II b類：大木式土器である(第27・28図、図版20・21)。

74・75はボタン状の貼付が付された土器である。75は波状口縁を呈する折り返し口縁をもち、波頂部の右側口唇には指頭の圧痕がみられる。76～79は沈線や三角形陰刻文が施され、口唇部から頸部に隆帯が垂下する土器である。76・77は同一個体で、胎土は緻密で焼成も良好である。口縁部が外反し体部がやや膨らむ土器である。口唇部と口唇部のボタン状貼付および頸部の隆帯にはLR原体の側面圧痕が施されるが、口唇部には交互刺突による三角形陰刻文が、頸部隆帯には三角形陰刻文が等間隔で付加されている。口唇部から頸部まで垂下する隆帯にはL原体の側面圧痕が横位に施される。口縁部文様帯には横位に5条の沈線が施され、沈線に接するように三角形陰刻文が等間隔で施される。体部はLR縄文が施され、綾絡文が縦位に表出している。78は頸部が「く」字状に屈曲し口縁部が外反する。口縁部には平行沈線が斜位に施され、体部には縦位のRL縄文と綾絡文が間隔をもって施されている。79は口縁部の破片である。RL縄文を施した後で、半截竹管による2条の平行沈線が横位に施され、さらに垂下する隆帯を挟むように引かれている。隆帯上には半截竹管の押しきによる爪形が刻まれている。80は花卉状の突起をもつ波状口縁で、中央部に円形透しがある口縁部である。両面にはL原体の側面

圧痕が施されている。81は浅鉢で内湾する口縁部である。口縁部上端は無文帯であり、その直下には小突起上とこの左右や粘土紐貼付による細い隆帯に沿って、L原体の側面圧痕が施されている。82～85はキャリパー形を呈する口縁部破片である。82～84は同一個体であり、RL縄文を施文した後、L原体の側面圧痕を施している。85はRL縄文を施文した後、細い粘土紐貼付による隆帯とL原体の側面圧痕を施している。87～89は同一個体の体部上半の破片である。平行沈線と羽状縄文を横位に施文している。90・91はやや外反する折り返された口縁で、口縁部と体部にはLR縄文が施されている。91には補修孔が認められる。92～99は体部破片である。92・98・99はRL縄文が横位に施文され、93～97はRL縄文による羽状縄文が縦位に施文されている。また、92・93には縄文原体の側面圧痕が認められる。100～103は波状口縁を呈する口縁部の破片である。100・101は同一個体で、口縁部はやや内傾する。口縁の波頂下には逆「U」字の粘土紐が貼付されている。体部文様は磨滅が激しく判然としない。102～103は同一個体である。「く」字状を呈する口縁部には、横位に数条施された沈線間に円形の刺突文が施されている。

Ⅱc類：平行沈線が引かれた北陸系の土器である(第29・30図、図版22・23)。

104は口縁部に平行沈線を右下りに施した後、その上下に平行沈線を横位に引いている。105は右下りの平行沈線に左下りの沈線が数条付加されており、格子目文が意識されている。106は斜位の平行沈線の下方に、横位の平行沈線に挟まれた隆帯がある。107の口唇部は折り返され縄文原体の側面圧痕が施されている。横位の平行沈線を施文後右下りの平行沈線を施しているが、さらに左下りの沈線が付加され格子目文が意識されている。108は平行沈線を頸部には横位に、体部には縄文を施文後に縦位に施されている。縄文原体は磨滅が激しく不明である。109～115は口縁部文様帯に縄文を施した後で、平行沈線がやや間隔を空けて縦位に引かれている。キャリパー形の深鉢形土器である。109～112は同一個体で、口唇部にはR原体の側面圧痕を縦位に施し、内湾する口縁部文様帯にはLR縄文を施文した後、上下に平行沈線を横位に施して区画し、縦位の平行沈線や曲走する平行沈線を充填している。また、頸部近くに小突起を貼付し、L字状、逆L字状の隆帯を上下から伸ばして連結させ、R原体の側面圧痕を施している。113・114は同一個体で、口唇部と頸部に平行沈線を横位に廻らし、LR縄文を施文した上に縦位の平行沈線を充填している。口縁部には円形刺突も付加している。補修孔が1カ所認められる。115は磨滅しているため地文は不明であるが、口唇部に口縁と平行する沈線、その下方に縦位の平行沈線を施文している。橋状把手も付けられている。116～118は口唇部に細かく浅い縦の沈線を施文し、その下方に半歳竹筥による横位の平行沈線で区画している。この区画内に連続した逆三角形の挟り込みを施し、蓮華文を作出している。口縁部文様帯には縦位の平行沈線を施文したキャリパー形の深鉢形土器である。116～118は同一個体である。119～121は同一

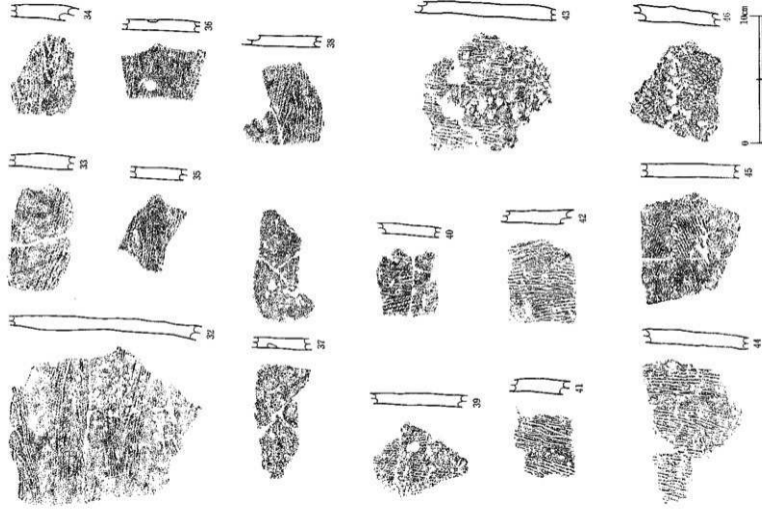
個体で、蓮華文の下方に横位に施された平行沈線上には貼付による突起がある。その下方には縦位の平行沈線が密に引かれて口縁部文様帯となっている。122・123は器面の磨滅が激しく、蓮華文の中の細かい縦の沈線は不明であるが、連続した逆三角形の挟り込みが施されている。124・125も同一個体である。極端なキャリパー形を呈し、口唇部と頸部に蓮華文が施されている。上下の蓮華文に挟まれた口縁部文様帯には、地文として細かい縦位の沈線を充填し、その上端に逆三角形の挟り込みが施され、地文の上には玉抱き三叉文や、半截竹管による斜位沈線や曲線が引かれている。126～141は体部に半截竹管による縦位の区画の中に、鋸歯状、Y字形などの幾何学的な平行沈線が充填されている。126～130は平行沈線が縦位に施文され、その間に126・127ではV字形や縦位の鋸歯状平行沈線、128では縦位の鋸歯状平行沈線、129では縦位の鋸歯状平行沈線と半截竹管による爪形文、130では楕円がそれぞれ充填されている。131は縦位に鋸歯状平行沈線が、132はクランク状や円形の平行沈線が施文されている。133～141は同一個体で、口縁部には3条の隆帯が貼付され、上位は無文帯、下位は平行沈線・交互刺突文が施文されている。体部にはLRの結節縄文が地文として、頸部の隆帯下には平行沈線によるY字形文が施されている。

第Ⅲ群土器(第31図、図版24)：縄文時代晩期の土器を一括した。

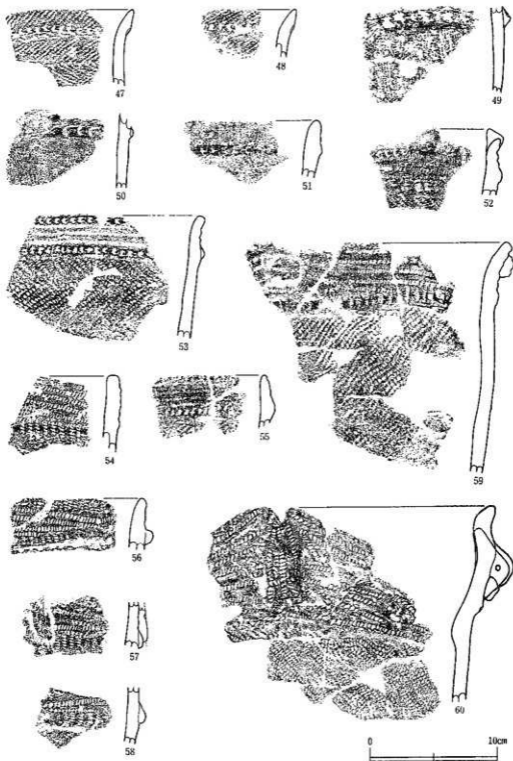
142は浅鉢形土器の口縁部から底部の破片である。残存部の器高は6.9cmで、図上復元による口径は12.2cm、底径は5.4cmである。無文の器面には、胎土に含まれた砂粒が露出し幾らかザラザラしている。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色を呈する。143は注口土器の破片である。口唇とその外面に小突起を付している。内傾する口縁部上半には3段の載痕列、下半には浮き彫り風の文様を施している。144～149は浅鉢形土器の破片である。144にはやや内湾する口縁部に載痕列を内包する2条の沈線が横位に施されている。体部には磨消縄文手法による文様が描かれ、LR縄文が充填施文されている。145～148は同一個体である。口唇上に刻み目が施され、口縁部には横位に8条の沈線を施文して、上から3条目の沈線上に2個一對の小突起を付している。体部にはRL縄文が縦位と斜位に施されている。底面は平底である。口縁の内側には1条の沈線が走る。149は口縁が小波状を呈すると思われる。口縁部には6条の平行沈線が横位に施され、体部にはLR縄文が施文されている。口縁の内側には1条の沈線が走る。体部の両面には煤状炭化物が付着している。

底部資料(第32・33図、第34図168～173)

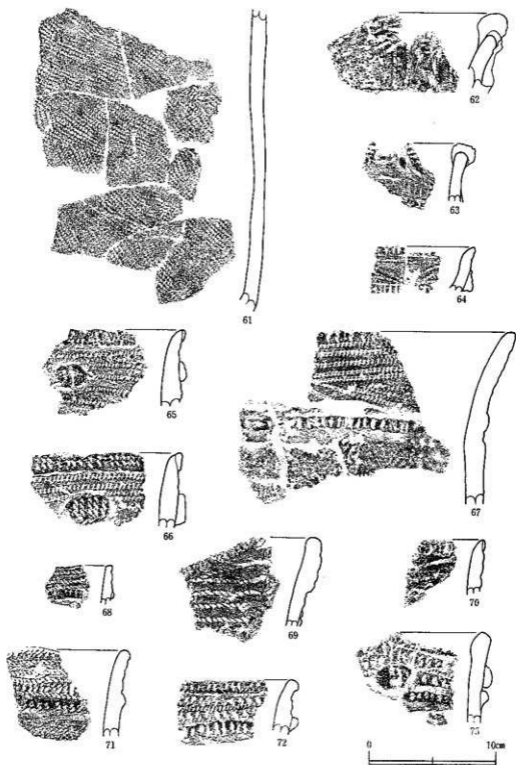
150～164は、土器製作時に覆かれた編物の圧痕が残っている底部破片で、150～162はすだれ状圧痕、163・164には網代痕が認められる。165には木の突と思われる圧痕が認められる。166にはミガキ状のナデが施されており、その工具痕がある。167には棒状工具の痕跡が認められる。168にはLR縄文が施されており、胎土に繊維を含む軽い土器である。170にはRL縄文が



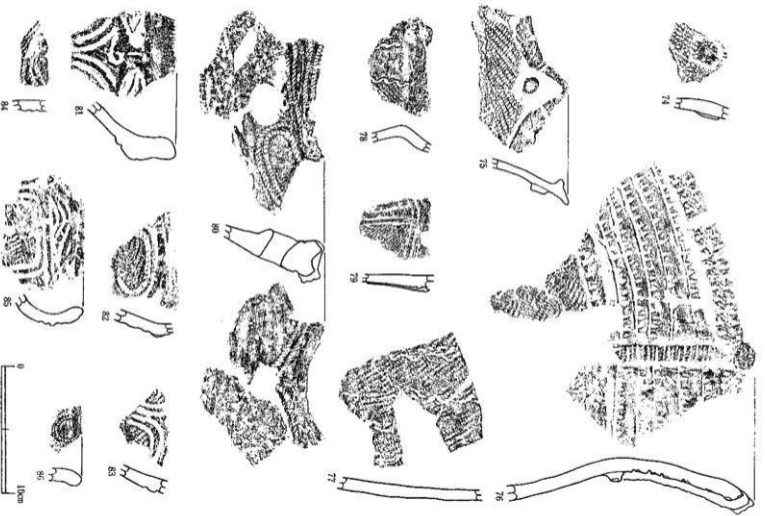
第24圖 遺跡外出土器(1)



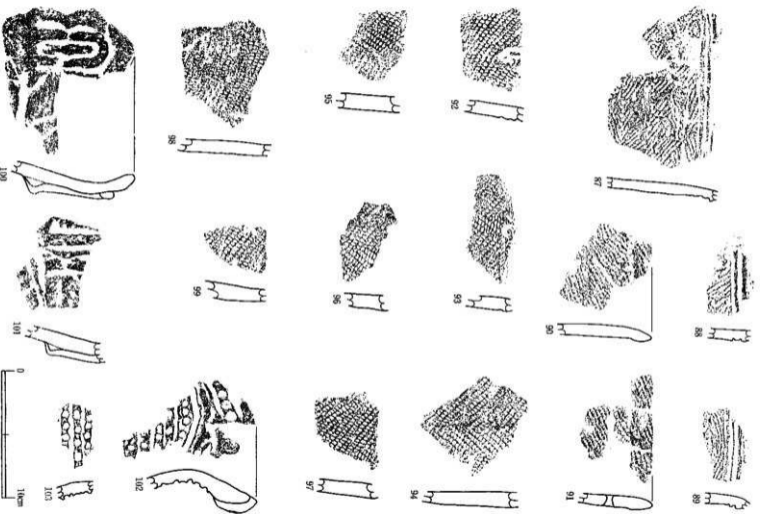
第25図 遺構外出土土器(2)



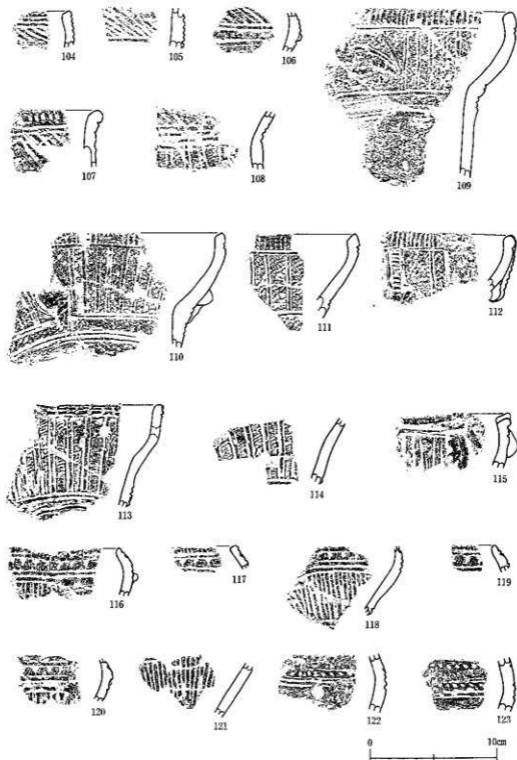
第26圖 遺構外出土土器(3)



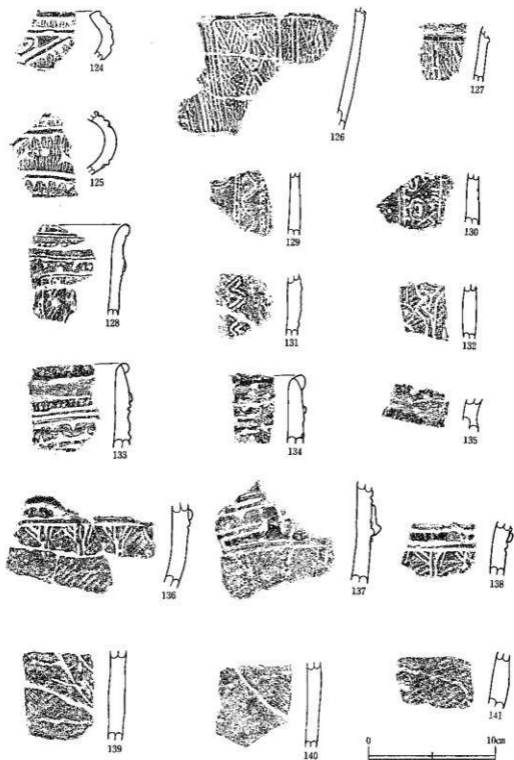
第27圖 遺跡外出土土器(4)



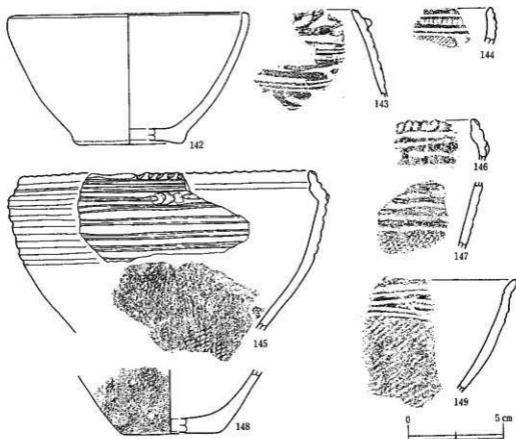
第28圖 遺構外出土土器(5)



第29図 遺構外出土土器(6)



第30圖 遺構外出土土器(7)



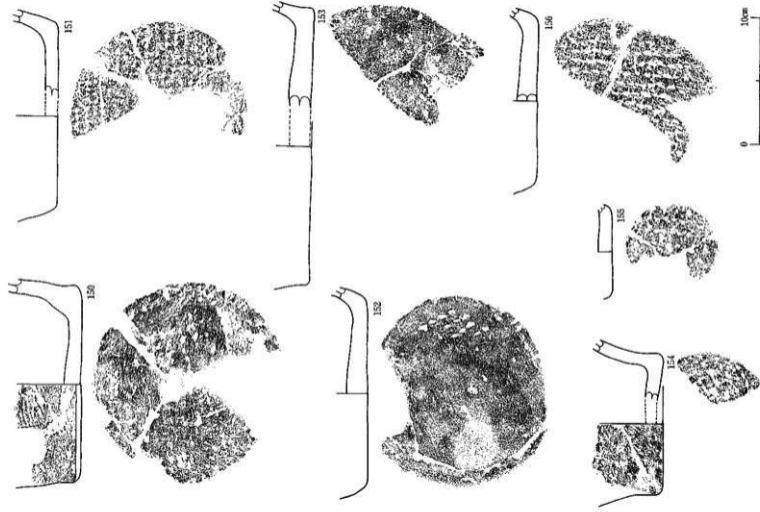
第31図 遺構外出土土器(8)

施されている。

本遺跡から出土した底部資料は、上げ底ぎみのものが多い。また、出土資料の大半が破片で底径の値は図上復元によるが、大きいもので約20cm、小さいもので約6cmである。時期は縄文時代前期から中期前葉に入るものと考えられ、第Ⅰ・Ⅱ群土器の底部もあると思われる。

(2) 土製品

出土した土製品は、有孔土製品1点(第34図174、図版24)だけである。しK45グリッドの第Ⅰ層中から出土した。形状は中央に膨らみをもたせた算盤玉形を呈する。その大きさは、最大径3.2cm、長さ3.2cmであり、孔径0.4cm(図上)・0.5cm(図下)、重さ24.8gである。全面滑らかに仕上げられており、孔は両端から穿たれている。胎土には砂粒を少量含み、焼成は良好で堅くしまっているが、焼成時の貫入と剥落が認められる。色調は浅黄褐色を呈している。



第32圖 遠藤外出土器(9)

第4章 調査の記録



157



158



159



160



161



162



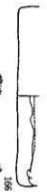
163



164



165



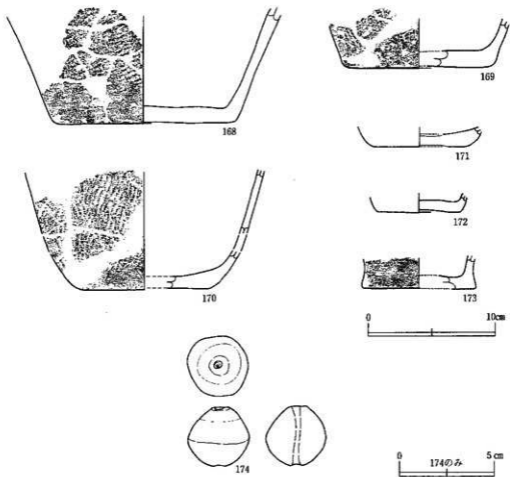
166



167



第33図 遺構外出土土器(10)



第34図 遺構外出土土器・土製品(11)

(3) 石器

出土した石器は、石鏃・石槍・石錐・石匙・石篋・スクレイパー・二次加工のある剥片・打製石斧・磨製石斧・半円状扁平打製石器・凹石・磨石・礫石器・砥石など78点（遺構内19点・遺構外59点）である。また、剥片・砕片が中コンテナ（規格 54×34×9.5cm）で1箱分出土した。なお、各石器の大きさ等は、第4・5表にまとめて記載した。

石鏃（第35図 S20～26、図版25）

7点出土した。基部の形態から3種類に分けられた。

- ①凹基無茎鏃：基部に抉りのあるものである（S20・21）。
- ②平基有茎鏃：直線的な基部に茎部が作出されたものである（S22）。
- ③円基鏃：基部に丸みを帯びたものである（S23～26）。

これら石鏃は、ほとんどが両面に丁寧な押圧剥離が施されている。断面形は凸レンズ状、菱形を呈している。基部にアスファルトの付着したものはなかった。

石槍（第35図 S27・28、図版25）

2点出土した。いずれも両面に二次加工が施されている。S27は平面形が木葉形を呈し、最大幅はほぼ体部中央にあり、基部の形態は丸みを帯びている。S28は基部を欠損している。

石錐（第35図 S29、図版25）

1点出土した。厚手の剥片の一端に断面形が三角形を呈する錐部が作出されており、両面ともに素材の剥離面を残している。

石匙（第35図 S30・31、第36図 S32～40、図版25）

11点出土し、縦型と横型に分けられた。

①縦型：主に縦長剥片を素材としている（S30～37）。つまみはバルブ部分に作られているものが大半であるが、S31は素材の末端部に作出されている。S33・34は刃部の大半、S36はつまみ部と刃部先端、S37はつまみをそれぞれ欠損している。

②横型：主に横長剥片を素材としている（S38～40）。S38・40は、つまみがバルブ部側に作られており、S39は片側縁に作出されている。

これらの石匙は、両面ともに素材の剥離面を残している。また、S30・38のつまみの括れには、アスファルトが付着している。

石篋（第37図 S41・42、図版25）

2点出土した。いずれも両面全体に二次加工が施され、刃部はともに弧状を呈している。S41は基部に打面を残し、S42は基部も弧状に調整されている。

スクレイパー（第37図 S43～48、第38図 S49～54、図版25・26）

14点出土した。主に素材とした剥片の側縁や末端部に刃部が作出されている石器である。刃

部の部位により3種類に分けられる。

- ①刃部が側縁に作出されているもの(S43~50)。
- ②刃部が側縁および末端部に作出されているもの(S51)。
- ③刃部が末端部に作出されているもの(S52~54)。

二次加工のある割片(第38図S55~57、図版26)

3点出土した。周縁や両面の側縁の一部に不規則な二次加工が施されている。

打製石斧(第39図S58~60、図版26)

3点出土した。S58・59は平面形が撥形を呈し、片面に主要剥離面を残し刃部が形成されている。S60は刃部周辺に両面より加工が施されているが、素材とした礫の両面には自然面を残している。

磨製石斧(第39図S61~64、図版26)

4点出土した。S61の刃部は両凸刃である。S62は基部を欠損し、片面も剥離しているが、剥離後に再加工されて刃部が作出されている。S63は刃部を欠損している。S64は刃部欠損後、両面から再加工が施されている。

半円状扁平打製石器(第40図S65・66、図版27)

2点出土した。S65は楕円形の扁平な礫を素材として、一方の長側縁の中央部を両面から打ち欠いた後、幅0.6~1cmの平滑面を作出している。このため刃部作出の際の剥離度がほとんど見えなくなっている。S66は長楕円形の扁平な礫の両端を両面から打ち欠き抉りを作成している。一方の長側縁に幅2cmの平滑面を作出している。

凹石(第40図S67・68、第41図S69~74、第42図S75、図版27・28)

9点出土した。素材は円礫や楕円礫がほとんどである。S70・73・74には一面に凹みが作られているが、他は両面に1~3の凹みが作られている。S72・74・75はさらに磨面をもつ。

礫石器(第42図S76、図版28)

1点出土した。素材の一部が片面から加工されている。

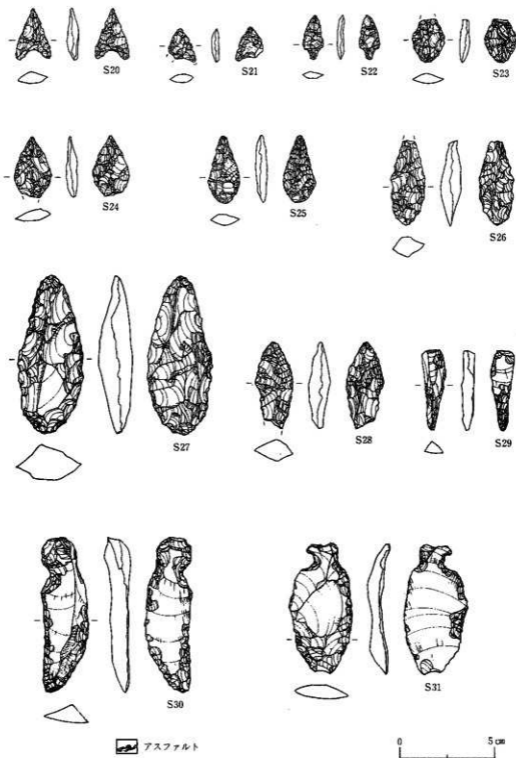
砥石(第42図S77、図版28)

1点出土した。素材の片面に数条のU字状の浅い溝を有している。

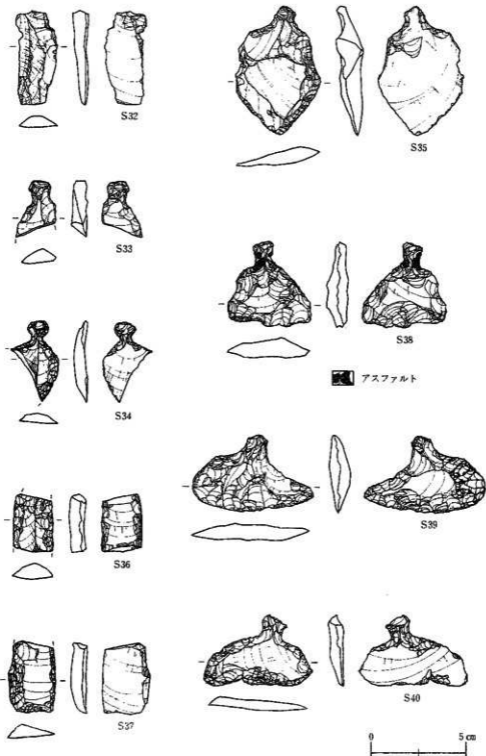
(4) 石製品

有孔石製品(第42図S78、図版28)

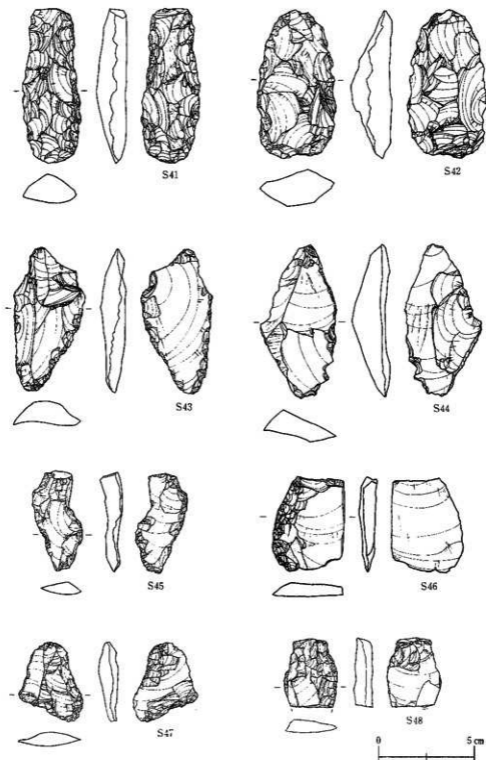
1点出土した。卵形の石を素材とし、長軸の両端から孔を穿ち、貫通させている。孔面には螺旋状痕が認められる。



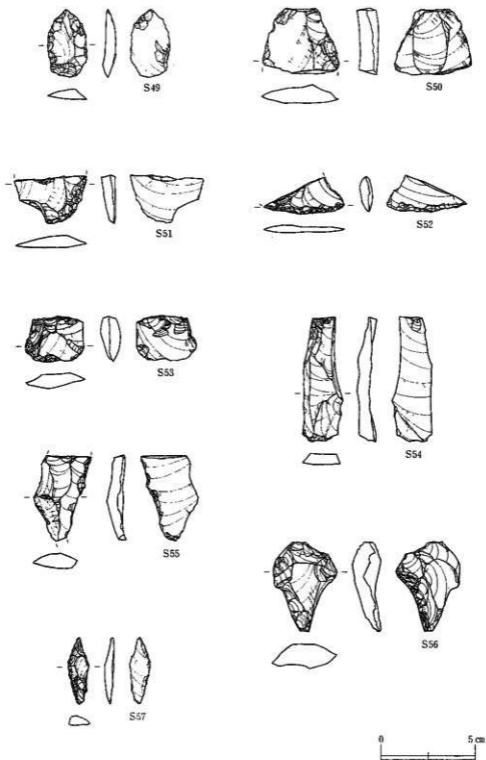
第35図 遺構外出土石器(1)



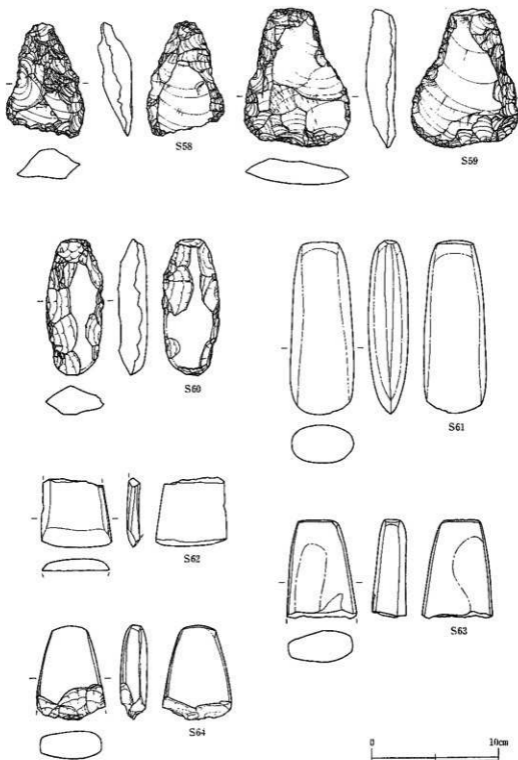
第36図 遺構外出土石器(2)



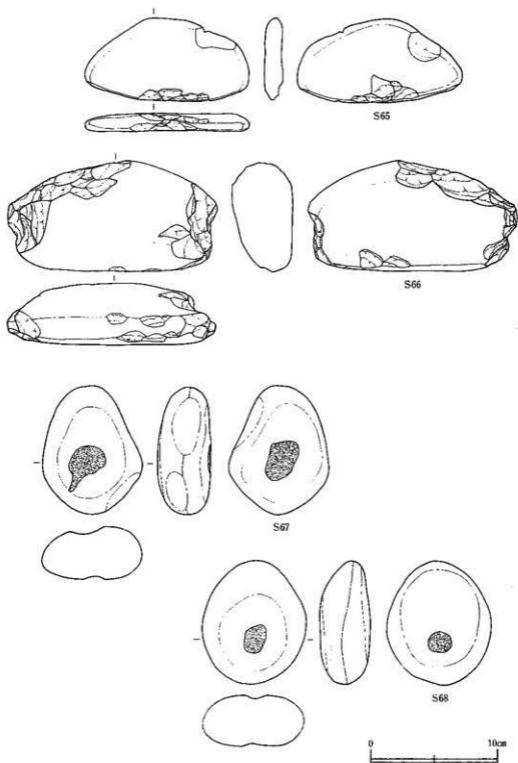
第37図 遺構外出土石器(3)



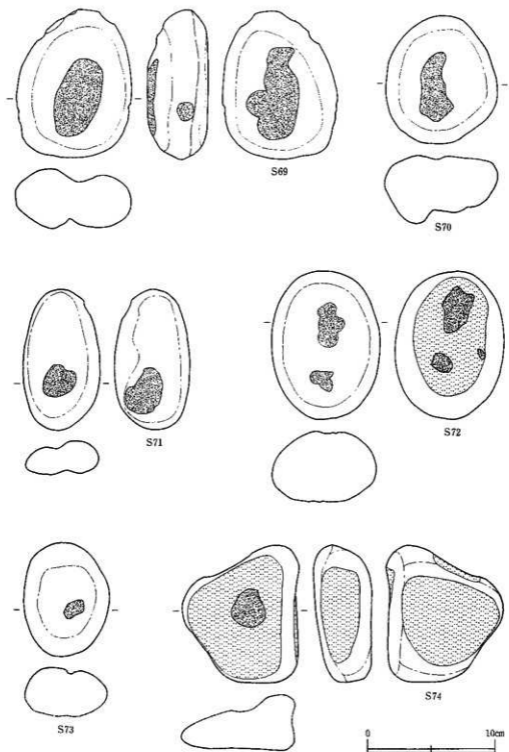
第38圖 遺構外出土石器(4)



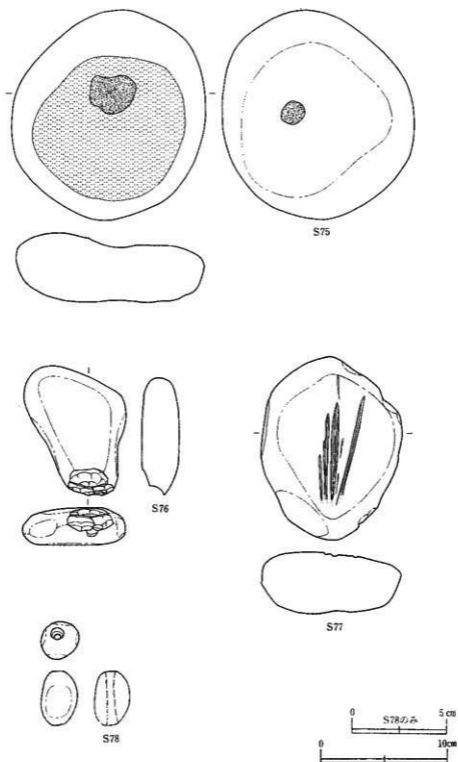
第39図 遺構外出土石器(5)



第40圖 遺構外出土石器(6)



第41図 遺構外出土石器(7)



第42圖 遺構外出土石器・石製品(8)

挿 番 号	図 番 号	版 番 号	出 土 地 区	器 種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重 量 (g)	石 質
22-S 1	16-S 1	SI08-Pit 5		石 鐵	25.0	16.0	7.0	1.71	黒曜石
S 2	S 2	SI08-Pit13		石 鐵	25.5	14.0	5.0	0.91	黒曜石
S 3	S 3	SI08-Pit14		石 鐵	27.0	(15.0)	4.0	(1.00)	頁 岩
S 4	S 4	SI08-Pit 9		石 槍	68.0	15.0	11.0	9.78	頁 岩
S 5	S 5	SI08-Pit14		剝片石器	(29.5)	24.0	9.0	(5.73)	頁 岩
S 6	S 6	SI08-Pit 2		スクレイパー	87.0	47.0	24.0	83.18	頁 岩
S 7	S 7	SI08-Pit13		凹 石	103.0	93.0	53.0	584.33	凝灰岩
S 8	S 8	SI31-Pit 3		石 鐵	31.0	16.0	6.0	2.00	頁 岩
S 9	S 9	SI31-Pit 5		石 鐵	39.0	18.0	7.0	3.97	頁 岩
S10	S10	SI31-Pit 6		石 鐵	46.0	20.0	8.0	6.16	頁 岩
S11	S11	SI31-Pit 9		スクレイパー	35.5	41.0	11.0	15.85	頁 岩
23-S12	S12	SI31-Pit 2		スクレイパー	38.0	39.0	9.0	7.91	頁 岩
S13	S13	SI31-Pit 5		磨 石	127.0	98.0	49.0	825.94	凝灰岩
S14	S14	S K37		石 鐵	51.0	17.0	4.0	2.93	頁 岩
S15	S15	S K37		石 鐵	41.0	18.0	8.0	4.62	頁 岩
S16	S16	S K37		石 槍	64.0	19.0	11.0	8.93	頁 岩
S17	S17	S K37		石 鎚	70.5	46.0	19.0	63.84	頁 岩
S18	S18	S K37		剝片石器	(42.0)	31.0	16.0	(23.17)	頁 岩
S19	S19	S K57		石 鐵	39.0	19.0	8.0	3.57	頁 岩
35-S20	25-S20	MF51		石 鐵	27.0	18.0	6.0	1.84	頁 岩
S21	S21	L S45		石 鐵	(18.0)	(15.0)	4.0	(0.86)	黒曜石
S22	S22	ME39		石 鐵	23.5	11.0	4.0	0.73	頁 岩
S23	S23	L S48		石 鐵	(23.0)	17.0	5.0	(1.76)	頁 岩
S24	S24	L S48		石 鐵	(32.0)	19.0	6.0	(2.63)	頁 岩
S25	S25	MC49		石 鐵	35.5	17.0	6.0	2.95	頁 岩
S26	S26	MC47		石 鐵	(45.0)	13.0	11.0	(6.98)	頁 岩
S27	S27	L Q49		石 槍	84.0	34.5	18.0	40.63	頁 岩
S28	S28	MD46		石 槍	(46.0)	20.0	12.0	(8.16)	頁 岩
S29	S29	L R39		石 錘	42.5	13.0	7.0	3.07	頁 岩
S30	S30	MB47		石 匙	82.5	25.0	13.5	20.53	頁 岩
S31	S31	MF51		石 匙	69.0	34.5	11.0	17.30	頁 岩
36-S32	S32	MF52		石 匙	50.0	22.0	8.0	6.76	頁 岩
S33	S33	MF50		石 匙	(30.0)	(21.0)	(8.5)	(3.67)	頁 岩
S34	S34	L S48		石 匙	(43.0)	(25.0)	7.0	(3.56)	頁 岩
S35	S35	LR45		石 匙	68.0	45.0	14.0	25.41	頁 岩
S36	S36	L S51		石 匙	(31.0)	(21.0)	(9.0)	(7.30)	頁 岩
S37	S37	L S47		石 匙	(38.0)	(25.0)	(8.5)	(9.06)	頁 岩
S38	S38	L S48		石 匙	45.0	45.0	11.0	16.31	頁 岩
S39	S39	L K47		石 匙	41.0	64.0	11.0	19.58	頁 岩
S40	S40	L S47		石 匙	38.0	58.0	8.0	10.53	頁 岩

()内の数値は残存値である

第4表 石器計測一覧(1)

挿 番 号	図 版 番 号	出 土 地 区	器 種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重 量 (g)	石 質
37-S41	25-S41	MC47	石 筥	81.0	30.5	15.5	38.08	頁 岩
S42	S42	LL44	石 筥	78.0	42.0	21.0	59.08	頁 岩
S43	S43	LK45	スクレイパー	76.0	38.0	13.0	25.71	頁 岩
S44	S44	LR38	スクレイパー	81.0	40.0	20.0	34.43	頁 岩
S45	S45	LK45	スクレイパー	53.0	27.5	12.0	11.34	頁 岩
S46	26-S46	LO36	スクレイパー	(38.0)	(50.0)	9.0	(19.61)	頁 岩
S47	S47	LT44	スクレイパー	42.0	34.0	10.0	10.19	頁 岩
S48	S48	LT48	スクレイパー	(36.0)	(28.0)	10.0	(11.30)	頁 岩
38-S49	S49	LT39	スクレイパー	36.0	20.5	7.0	4.30	頁 岩
S50	S50	LT38	スクレイパー	(35.0)	(41.0)	12.0	(15.35)	頁 岩
S51	S51	LT49	スクレイパー	(25.0)	(38.0)	(7.0)	(5.85)	頁 岩
S52	S52	LS48	スクレイパー	(19.0)	(43.0)	(6.0)	(3.62)	頁 岩
S53	S53	MB49	スクレイパー	24.0	32.0	10.5	6.78	頁 岩
S54	S54	LI40	スクレイパー	66.0	21.0	10.0	9.22	頁 岩
S55	S55	ME50	二次加工のある削片	(45.0)	31.0	10.0	8.91	頁 岩
S56	S56	LR37	二次加工のある削片	37.5	34.0	15.0	15.74	頁 岩
S57	S57	MF51	二次加工のある削片	35.0	11.0	5.0	1.39	頁 岩
39-S58	S58	LO44	打製石斧	90.0	61.0	25.0	96.42	頁 岩
S59	S59	LO44	打製石斧	110.0	84.0	23.0	162.57	頁 岩
S60	S60	LS51	打製石斧	107.0	45.0	22.0	121.76	凝灰岩
S61	S61	LQ38	磨製石斧	136.0	50.0	30.0	341.89	凝灰岩
S62	S62	LS50	磨製石斧	(55.0)	56.0	(10.0)	(48.55)	安山岩
S63	S63	LR43	磨製石斧	(78.0)	(55.0)	(27.0)	(189.23)	安山岩
S64	S64	LQ44	磨製石斧	(74.0)	(54.0)	(21.0)	(107.44)	粘板岩
40-S65	27-S65	MF51・52	半円状扁平打製	65.0	130.0	14.0	138.57	安山岩
S66	S66	LN44	半円状扁平打製	87.0	165.0	48.0	851.28	凝灰岩
S67	S67	LO40	凹 石	110.0	79.0	41.0	431.51	安山岩
S68	S68	LS47	凹 石	92.0	82.0	40.0	347.45	安山岩
41-S69	S69	LR35	凹 石	116.0	90.0	47.0	582.59	凝灰岩
S70	S70	MB46	凹 石	101.0	88.0	53.0	546.12	凝灰岩
S71	S71	LR38	凹 石	110.0	60.0	28.0	193.29	安山岩
S72	28-S72	LK45	凹石+磨石	116.0	84.0	58.0	772.56	凝灰岩
S73	S73	MC41	凹 石	90.0	67.0	40.0	325.57	凝灰岩
S74	S74	LP35	凹石+磨石	108.0	92.0	45.0	457.51	凝灰岩
42-S75	S75	LK・LL45	凹石+磨石	165.0	152.0	57.0	1309.60	凝灰岩
S76	S76	MF51	礫石(斧)	102.0	82.0	29.0	331.69	安山岩
S77	S77	MF51	礫 石	145.0	111.0	49.0	988.68	砂 岩
S78	S78	LS38	石製品	29.0	19.0	19.0	10.58	安山岩

()内の数値は残存値である

第5表 石器計測一覽(2)

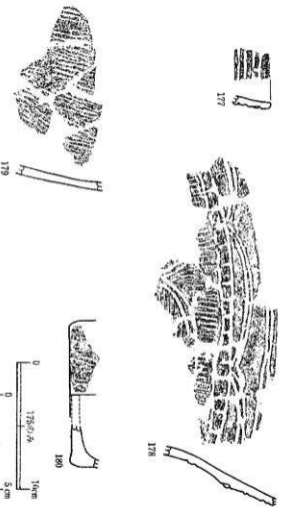
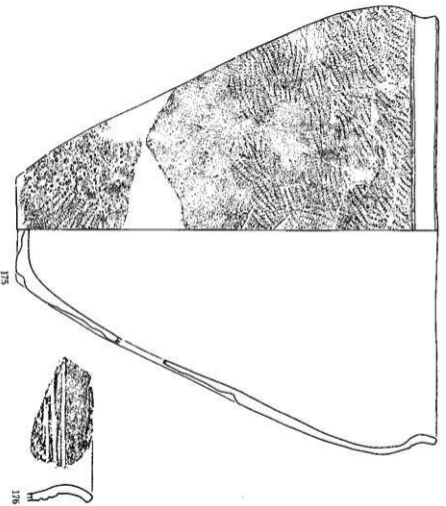
2. 弥生時代の遺物(第43図、第44図181・182、図版29)

遺構は検出されなかったが、甍形・鉢形土器の破片が少量出土した。175は甍形土器の破片から図上復元したものである。復元によると口径32.2cm、体部最大径35.4cm、器高33.3cm、底径8cmである。平底の底部から斜めに直線的に立ち上がり、頸部で括れ口縁に向かって外反する器形である。口縁部に無文帯があり、頸部に沈線を1条巡らし、体部にはL R 縄文を全面に施文する。縄文は体部上半には横位であるが、下は不定方向である。176は甍形土器の口頸部の破片である。外反する口縁に無文帯があり、頸部には3条の平行沈線を巡らし、体部には縄文(原体不明)を施文する。177~180は同一個体である。これらの破片から復元される器形は、頸部から外反して口縁が大きく開く深鉢形を呈するものと思われる。口縁部文様帯は上部に沈線を数条平行に巡らし、その下に平行沈線で連弧文を施している。頸部には隆帯を巡らして、その上下に沈線を施した後で隆帯に刻み目を入れている。体部にはL 摺糸文を地文として、平行沈線で連弧文を施文している。また、口縁部の最上位の沈線と直下の沈線間には刺突痕が1個認められる。177・178の外側面、179は両面の一部に煤状炭化物が付着している。181は口縁部の破片で、口縁に沿って刺突痕が施文されている。182は体部の破片で、外面には条痕文が横位に施され、内面は横ナデが認められる。外面の一部に煤状炭化物が付着している。181は182の口縁部と思われる。

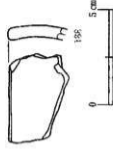
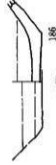
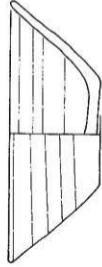
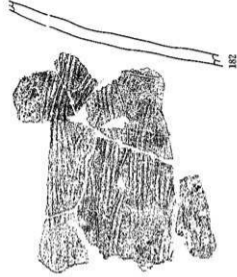
3. 平安時代の遺物(第44図183~187、図版30)

弥生時代と同様に遺構は検出されず、土師器・須恵器の杯がわずかに出土した。このうち全体の形状を知り得る資料は土師器杯1点のみで、他は全て破片である。

183~186は土師器杯である。183は口縁部と体部の一部を欠いているだけで、ほぼ完形に近い。口径13.6cm、器高4.8cm、底径5.5cmである。ロクロで成形され、器内の底面中央部がわずかに盛り上がっている。ロクロからの切り離しは右回転糸切りである。成形後の調整はなく、器厚0.3~0.8cmの胎土に含まれた砂粒が、器面に露出し幾分ザラザラしている。焼成は良好である。色調は橙色を呈する。184はやや外反する口縁部の破片である。ロクロ成形されている。焼成は良好で堅緻であり、外面がにぶい黄橙色を呈し内面は黒色処理されている。185・186は底部の破片である。図上復元による底径は185が5.7cmで、186が5cmである。いずれも右回転の糸切りがみられる。また、胎土は砂粒を含み、焼成は良好である。色調は、185が浅黄橙色、187が外面はにぶい黄橙色、内面は浅黄橙色を呈する。187は須恵器杯の体部下半の破片であり、ロクロ成形されている。焼成は良好で堅緻である。色調は暗灰黄色を呈している。



第43圖 遺構外出土土器(12)



第44図 遺構外出土器(13)

4. その他の遺物

中世以降と思われる土器、内湾する口縁部の破片が1点出土した(第44図188、図版30)。ロクロ成形されたと思われる。焼成は良好で堅緻である。色調は外面がにぶい黄褐色、内面がにぶい黄橙色を呈する。また、両面には煤状炭化物が付着しており、外面には口唇から筋状に垂れている。

参考文献

1. 江坂輝弥『石神遺跡』ニューサイエンス社 1970(昭和45年)
2. 村越 潔『円筒土器文化』雄山閣 1974(昭和49年)
3. 青森県教育委員会『中の平遺跡発掘調査報告書—青函トンネル資材運搬専用・道路建設工事関係発掘調査—』青森県埋蔵文化財調査報告書第25集 1974(昭和49年)
4. 青森県立郷土館『縄文式土器のうつりかわり』1976(昭和51年)
5. 佐原 真編『弥生土器Ⅱ』ニューサイエンス社 1983(昭和58年)
6. 石川県立埋蔵文化財センター『鹿島町徳前C遺跡調査報告(Ⅳ)—国道159号線築業に係る石川県鹿島郡鹿島町徳前C遺跡第4次緊急発掘調査報告—』1983(昭和58年)
7. 秋田県田沢湖町教育委員会『黒倉B遺跡 第1次発掘調査報告』1985(昭和60年)
8. 秋田県田沢湖町教育委員会『黒倉B遺跡 第2次発掘調査報告』1986(昭和61年)
9. 能都町教育委員会『石川県能都町真臨遺跡』1986(昭和61年)
10. 白鳥良一「前期大木式土器様式」『縄文土器大観1』小学館 1989(平成元年)
11. 丹羽 茂「中期大木式土器様式」『縄文土器大観1』小学館 1989(平成元年)
12. 三宅敏弥「円筒土器下層様式」『縄文土器大観1』小学館 1989(平成元年)
13. 三宅敏弥「円筒土器上層様式」『縄文土器大観1』小学館 1989(平成元年)
14. 加藤三千雄「新保・新崎式土器様式」『縄文土器大観1』小学館 1989(平成元年)
15. 鈴木道之助『図録 石器入門事典 縄文』柏書房 1991(平成3年)
16. 沢沢充則編『縄文時代研究事典』東京堂出版 1994(平成6年)

第5章 自然科学的分析

蟹子沢遺跡における自然科学分析

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

秋田県では、これまでも縄文時代遺跡等で住居構築材等の用材選択や遺構への遺体埋納の可能性を検討するために自然科学分析が行われてきた。このうち住居構築材では、クリとニレ属が多く同定されている。この傾向は、青森県における縄文時代の住居構築材の樹種とも調和的である。また、遺体埋納の可能性については主としてリン分析から検討しているが、現時点ではこれを積極的に支持する結果は得られていない。

本報告では、縄文時代の各遺構から検出された炭化材の樹種を明らかにし、当該期の木材利用について検討する。同時に、炭化材の放射性炭素(^{14}C)年代測定を行い、各遺構の構築年代に関する資料を得る。また、土器埋設遺構SR24およびSR36の土器内覆土や掘り方内覆土等を対象としてリン・カルシウム分析を行う。

第1節 遺構の年代および出土した炭化材の樹種

1. 試料

試料は、各遺構(SI08, SI31, SK37, SK44, SK57)から検出された炭化材14点(試料番号①~⑭)である。樹種同定は、これらの炭化材全点について行い、放射性炭素年代測定は試料番号①, ⑥, ⑩~⑭の7点について行う。各試料の詳細は、分析結果とともに第6表に示した。

2. 方法

(1) 放射性炭素年代測定

測定は、学習院大学放射性炭素年代測定室が行った。

(2) 炭化材同定

試料の木口(横断面)・柃目(放射断面)・板目(接線断面)の割断面を作成し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡(無蒸着・反射電子検出型)を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定した。

3. 結果

年代測定結果および樹種同定結果を表1に示す。年代測定の結果は、960±120y.B.P.～5070±90y.B.P.の間に収まる。一方炭化材は、試料番号③、⑩に2種類、試料番号④、⑪に3種類がそれぞれ認められた。これらの炭化材は全て落葉広葉樹で、9種類（オニグルミ・ブナ属・コナラ属コナラ亜属コナラ節・ヤマグワ・クリ・サクラ属・カエデ属・ケンボナシ属・エゴノキ属）が同定された。各種類の解剖学的特徴などを以下に記す。

・オニグルミ (*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* (Maxim.) Kitamura)

クルミ科クルミ属

散孔材で年輪界付近でやや急に管径を減少させる。管孔は単独および2～4個が複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は密に交互状に配列する。放射組織は同性～異性Ⅲ型、1～4細胞幅、1～40細胞高。

・ブナ属 (*Fagus* sp.) ブナ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2～3個が複合し、分布密度は高い。道管は単および階段穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織は同性～異性Ⅲ型、単列、数細胞高のものから複合放射組織まである。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus* sp.)

ブナ科

環孔材で孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で孔圏部は1～4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

・ヤマグワ (*Morus australis* Poiret) クワ科クワ属

環孔材で孔圏部は1～5列、晩材部へ向かって管径を漸減させ、のち塊状に複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は密に交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅱ～Ⅲ型、1～6細胞幅、1～50細胞高で、しばしば結晶を含む。

・サクラ属 (*Prunus* sp.) バラ科

散孔材で管壁厚は中庸、横断面では角張った楕円形、単独または2～8個が複合、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型、1～3細胞幅、1～30細胞高。

第6表 年代測定および樹種同定結果

番号	検出遺構 試料名	用途	推定時代	年代測定結果 (1950年よりの年数)	Gak No.	樹種名
①	S108-Pit1 覆土内炭化物	住居構築材	縄文時代前期末葉 ～中期前葉	4100±90 2150 B.C.	Gak-18470	クリ
②	S108-Pit2 覆土内炭化物	住居構築材	縄文時代前期末葉 ～中期前葉	——	——	クリ
③	S108-Pit8 覆土内炭化物	住居構築材	縄文時代前期末葉 ～中期前葉	——	——	クリ エゴノキ属
④	S108-Pit9 覆土内炭化物	住居構築材	縄文時代前期末葉 ～中期前葉	——	——	クリ サクラ属 カエデ属
⑤	S131-Pit2 覆土内炭化物	住居構築材	縄文時代前期末葉 ～中期前葉	——	——	クリ
⑥	S131-Pit3 覆土内炭化物	住居構築材	縄文時代前期末葉 ～中期前葉	4820±140 2870 B.C.	Gak-18471	クリ
⑦	S131-Pit4 覆土内炭化物	住居構築材	縄文時代前期末葉 ～中期前葉	——	——	コナラ属コナラ亜属コナラ節
⑧	S131-Pit5 覆土内炭化物	住居構築材	縄文時代前期末葉 ～中期前葉	——	——	クリ
⑨	S131-Pit8 覆土内炭化物	住居構築材	縄文時代前期末葉 ～中期前葉	——	——	クリ
⑩	S108-Pit13 覆土内炭化物	住居構築材	縄文時代前期末葉 ～中期前葉	4390±100 2440 B.C.	Gak-18472	オニグルミ カエデ属 ケンボナシ属
⑪	S108-Pit14 覆土内炭化物	用途不明	縄文時代前期末葉 ～中期前葉	5070±90 3120 B.C.	Gak-18473	ブナ属 コナラ属コナラ亜属コナラ節
⑫	SK37 覆土内炭化物	用途不明	縄文時代 (時期不詳)	4610±100 2660 B.C.	Gak-18474	クリ
⑬	SK44 覆土内炭化物	用途不明	縄文時代晚期	3040±80 1090 B.C.	Gak-18475	クリ
⑭	SK57 覆土内炭化物	用途不明	縄文時代中期前葉 以降	960±120A.D. 980	Gak-18476	クリ ヤマグル

・放射線炭素の半減期は、LIBBYの半減期5570年を使用した。

・カエデ属 (*Acer* sp.) カエデ科

散孔材で、横断面では角張った楕円形、単独および2～3個が複合、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列～交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～4細胞幅、1～30細胞高。細胞壁の厚さが異なる2種類の木繊維が、木口面において不規則な紋様をなす。

・ケンボナシ属 (*Hovenia* sp.) クロウモメドキ科

環孔材で孔部は1～3列、孔部外で急激に管径を減じたのち漸減する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性Ⅲ型～Ⅱ型、1～5細胞幅、1～50細胞高。

・エゴノキ属 (*Styrax* sp.) エゴノキ科

散孔材で、道管は単独もしくは2～4個が複合し、年輪界付近で管径を減ずる。道管は階段穿孔を有している。放射組織は異性Ⅱ型、1～3細胞幅、1～20細胞高。

4. 考察

(1) 年代値について

縄文時代前期末葉～中期前葉とされる試料番号①, ⑥, ⑩, ⑪は、 $4100 \pm 90y.B.P \sim 5070 \pm 90y.B.P.$ の値が得られた。この結果は、試料によって多少ばらつきがあるものの、東北地方における同時期の放射性炭素年代測定の結果（キリー・武蔵, 1984）とほぼ一致する。このことから、これらの炭化材が出土した各遺構年代は、出土遺物等から推定された年代観とほぼ調和しており縄文時代前期末葉～中期前葉（約4000年～5000年前）とみることができる。

縄文時代晩期とされる試料番号⑬の測定値は、 $3040 \pm 80y.B.C.$ で、これまでの例と比較すると若干新しい。しかし、これまでの測定値と大きくはずれていないこと、測定の誤差と使用した木材の樹齢の問題、測定技術上の問題等を考慮すれば、これまでの傾向に調和的と言える。

試料番号⑭は、縄文時代（時期不詳）とされている。推定値は 4610 ± 100 で、本遺跡における縄文時代前期末葉～中期前葉の試料で得られた測定値に収まる。他の試料が出土遺物から推定される年代観とほぼ一致していることを考慮すれば、この炭化材も縄文時代前期末葉～中期前葉と考えられる。

試料番号⑯は、縄文時代中期前葉以降とされる。測定値は 960 ± 120 で、他の縄文時代の測定値と大きく異なる。炭化材が検出された土坑は、S I 31内に掘られたものであるが、S I 31の年代値はこれまでの調査例と調和的である。このことを考慮すれば、この1点のみが、汚染されて異なった年代値を示したとは考えにくい。むしろ住居内に掘られた土坑が平安時代頃あるいはそれ以降のものである可能性もある。これについては、土層の観察に基づく遺構の切り合い関係等について再検討する必要がある。また、同土坑内から他に炭化材が検出されていれば、改めてその年代測定を行い測定値を比較することも必要である。

(2) 木材利用について

住居構築材と考えられる炭化材は、2 軒（S I 08, S I 31）ともにクリが多い。クリの他には、コナラ節・サクラ属・カエデ属・エゴノキ属が確認されたが、その点数は各1点であり、クリに比較して少ない。このことから、住居構築材にはクリが多用されていたと推定される。この結果は、秋田県内でこれまでに得られてきた同時期の住居構築材の樹種構成とも調和的である。

このような構築材は、使用時の大きさや重さを考慮すれば、遺跡周辺に生育していたものを利用したと考えられる。実際に関東地方では住居構築材の樹種構成が地域によって異なり、その樹種構成が花粉分析などから推定される古植生と調和的であることが指摘されている（高橋・植木, 1994）。これらのことから、縄文時代前期末葉～中期前葉の本遺跡周辺にはクリ・コナラ節・カエデ属等の落葉広葉樹が生育し、その中から構築材の適材としてクリを選択していたことが推定される。

土坑から検出された炭化材には、住居構築材に認められたクリ・コナラ節・カエデ風と、オニグルミ・ブナ属・ヤマグワ・ケンボナシ属が確認され、種類数が多い。これらの炭化材は、用途などに関する詳細が明らかでないため、評価・検討を行うことは難しい。ただし、住居構築材の樹種と同じ樹種が確認されていること、種類数が多いことなどを考慮すれば、これらの木材は周辺に生育しているものであって、特に樹種の選択なども無かったと思われる。

第2節 遺体埋納の可能性について

1. 試料

試料は、土器埋設遺構（SR24, SR36）から採取された土壌試料10点である。SR24では、土器内の覆土の上部、下部を各1点、掘り方内覆土1点を採取し、さらに、掘り方底面地山土（基本層位V層）1点、確認面の土（基本層位II層）1点を採取して対照試料とした。

SR36では、土器内覆土1点、掘り方内覆土1点を採取し、掘り方底面地山土（基本層位V層）1点を採取してSR36の対照試料とした。また、SR24とSR36の共通の対照試料として、LN40グリッド杭地点の表土1点、LQ38グリッド杭地点の表土1点を採取した。

2. 分析方法

リン、カルシウムの測定は、土壌標準分析・測定法委員会（1986）、土壌養分測定法委員会（1981）、京都大学農学部農芸化学教室（1957）などを参考にして、以下の操作工程で行った。

試料を風乾後、軽く粉碎して2.0mmの篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃、5時間）により測定する。風乾細土試料2.00gをケルダールフラスコに秤とり、はじめに硝酸（ HNO_3 ）5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（ HClO_4 ）10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、蒸留水で、100mlに定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（ P_2O_5 ）濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光度計によりカルシウム（ CaO ）濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン含量（ $\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ ）とカルシウム含量（ CaOmg/g ）を求める。

3. 分析結果

リン・カルシウム分析の結果を第7表に示す。

対照試料

リン酸含量は、LN40グリッド杭地点の表土（基本層位I層）1.13 $\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ 、LQ38グリッ

第7表 蟹子沢遺跡のリン・カルシウム分析結果

試料名	リン酸含量 P205mg/g	カルシウム含量 Ca0mg/g	上色・土性	備 考
SR24				
土器内覆土上部	1.59	0.86	10YR2/2黒褐・CL	
土器内覆土下部	1.42	1.08	10YR2/2黒褐・CL	
掘り方内覆土	1.60	0.87	10YR2/2.5黒褐・CL	
掘り方底面地山土 (基本層位V層)	1.52	1.11	10YR2/2黒褐・CL	
確認面の土 (基本層位II層)	0.73	0.57	10YR4/5褐・CL	
SR36				
土器内覆土	1.15	0.76	10YR2/2黒褐・L~CL	
掘り方内覆土	0.93	0.89	10YR2/2黒褐・L~CL	
掘り方底面地山土 (基本層位V層)	0.48	0.33	10YR4/4黒褐・CL	根混じる
対照試料				
LN40グリッド杭地点の 表土(基本層位I層)	1.13	0.69	10YR2/2黒褐・L~CL 10YR2/2黒褐・CL	根混じる 根多量に混じる
LQ38グリッド杭地点の 表土(基本層位I層)	2.87	3.88		

注。(1) 土 色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖(農林水産省農林水産技術会議事務局監修, 1967)による

(2) 土 性：土壌調査ハンドブック(ペドロジスト懇談会編, 1984)の野外土性の判定法による。
L…壤土(ある程度砂を感じ、ねばり気もある。砂と粘土が同じくらいに感じられる)
CL…草壇土(わずかに砂を感じるが、かなりねばる)

下杭地点の表土(基本層位I層)2.87P₂O₅mg/gを示し、基本層位I層のリン酸含量は採取地点により異なる。カルシウム含量は、LN40グリッド杭地点の表土(基本層位I層)0.69Ca0mg/g、LQ38グリッド杭地点の表土(基本層位I層)3.88Ca0mg/gを示し、リン酸同様基本層位I層のカルシウム含量も、採取地点により差がある。

・SR24

リン酸含量は、土器内覆土上部1.59P₂O₅mg/g、下部1.42P₂O₅mg/g、掘り方内覆土1.60P₂O₅mg/gを示し、SR24の対照試料の掘り方底面地山土(基本層位V層)は1.52P₂O₅mg/g、確認面の土(基本層位II層)は0.73P₂O₅mg/gである。土器内覆土と掘り方内覆土は、底面地山土とほぼ同じ値であったが、確認面の土(基本層位II層)と比べるとやや高い値を示す。

カルシウム含量は、土器内覆土上部0.86Ca0mg/g、下部1.08Ca0mg/g、掘り方内覆土0.87Ca0mg/gを示し、掘り方底面地山土(基本層位V層)は1.11Ca0mg/g、確認面の土(基本層位II層)は0.57Ca0mg/gである。土器内覆土と掘り方内覆土は、底面地山土より低い値であったが、確認面の土(基本層位II層)と比べるとわずかに高い値を示す。

・SR36

リン酸含量は、土器内覆土1.15P₂O₅mg/g、掘り方内覆土0.93P₂O₅mg/gを示し、SR36の対照試料の掘り方底面地山土(基本層位V層)は0.48P₂O₅mg/gである。土器内覆土は、底面地山土よ

り高く、掘り方内覆土よりもやや高い値を示す。

カルシウム含量は、土器内覆土0.76Ca0mg/g、掘り方内覆土0.89Ca0mg/gを示し、SR36の対照試料の掘り方底面地山土（基本層位V層）は0.33Ca0mg/gである。土器内覆土と掘り方内覆土は、底面地山土よりわずかに高い値を示す。

4. 考察

リン酸およびカルシウムの含量は、SR36で土器内覆土が掘り方内の土壌試料などよりも高い値を示す。しかし、SR24では土器内覆土と掘り方内の土壌試料との間に明確な差は認められない。また、共通の対照試料とした土壌の成分含量には幅があるので、今回の結果から遗体埋納の可能性は明確ではない。

土壌中に本来含まれるリン酸量、いわゆる天然賦存量についての報告事例（Bowen, 1983; Bolt・Bruggenwert, 1980; 川崎ほか, 1991; 天野ほか, 1991）によれば天然賦存量の上限は約3.0P₂O₅mg/g程度と推定される。また、人為的な影響を受けた既耕地では5.5P₂O₅mg/g（黒ボク土の平均値）という報告例がある（川崎ほか, 1991）。一方、カルシウム含量の天然賦存量は普通1~50Ca0mg/gとされている（藤貫, 1979）。このリン酸やカルシウムの天然賦存量と比較しても、その数値を著しく越える試料がなく、両成分を多く含む物質の痕跡は明確ではない。

<引用文献>

- 天野洋司・太田 健・草場 敬・中井 信（1991）中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量。農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, p.28-36.
- Bowen, H. J. M. (1983)「環境無機化学—元素の循環と生化学—」, 浅見輝男・茅野充男訳, 297p., 博友社 [Bowen, H. J. M. (1979) Environmental Chemistry of Elements].
- Bolt, G. H.・Bruggenwert, M. G. M. (1980)「土壌の科学」, 岩田逸午・三輪壽太郎・井上隆弘・陽捷行訳, 309p., 学会出版センター [Bolt, G. H. and Bruggenwert, M. G. M. (1976) SOIL CHEMISTRY].
- 土壌標準分析・測定法委員会編（1986）「土壌標準分析・測定法」, 354p., 博友社.
- 土壌養分測定法委員会編（1981）「土壌養分分析法」, 440p., 養賢堂.
- 藤貫 正（1979）カルシウム. 地質調査所科学分析法, 50: p.57-61, 地質調査所.
- 川崎 博・吉田 滯・井上恒久（1991）九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量. 農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, p.23-27.
- キーン C. T.・武藤康弘（1984）縄文時代の年代. 加藤晋平・小林達雄・藤本 強編「縄文文化の研究1 縄文人とその環境」, p.246-275, 雄山閣.
- 京都大学農学部農芸化学教室編（1957）「農芸化学実験書 第1巻」, 411p., 産業図書.
- 農林水産省農林水産技術会議事務局監修（1967）新版標準土色帖.
- ペドロジスト懇談会編（1984）「土壌調査ハンドブック」, 156p., 博友社.
- 高橋 敦・植木真吾（1994）樹種同定からみた住居構築材の用材選択. PALYNO, 2, p.5-18.

第6章 まとめ

蟹子沢遺跡の発掘調査は、東北横断自動車道秋田線建設に係った遺跡北東端部について実施した。調査の結果、当該部分では縄文時代前期末葉から中期前葉の竪穴住居跡、土坑、土器埋設遺構の他、柱穴様ビットなどが検出され、縄文時代前期から晩期の土器および石器、弥生時代の土器と平安時代の土師器・須恵器が出土した。

1. 遺構について

2軒の竪穴住居跡(S I 08・31)は土地造成で壁を削平されているが、住居全体プランは柱の配置やS I 08で検出された壁溝から長楕円形を呈し、長軸が10mを越す大形の住居跡と推察される。いずれも長軸方向の北側に地床炉を1基もっており、S I 08は長軸方向の北端部に土坑が付設されていた。県内で検出された大形の住居跡は、炉が2基以上のものがほとんどであり、蟹子沢遺跡のように1基のみという例はあまり見られない。したがって、本住居跡の場合は、削平を受けた際に消失した可能性もある。また、S I 08のように土坑が付設されている例は少なく、その用途についても定かでないが屋内に設けられた貯蔵穴(食べ物を蓄えた穴)と推定される。

両住居跡の時期はS I 08の柱穴・土坑の出土遺物から、縄文時代前期末葉から中期前葉に位置付けられる。S I 31では時期を決定づける資料が出土しなかったため明確にできないが、おそらくはS I 08と同時期と推測される。また、大形の住居跡の性格は、遺跡全体から位置づけなければならないが、調査区は遺跡の一部で、しかも地山まで削平された箇所が多く具体的位置づけが困難である。しかし、県内で同時期に大形の住居跡が検出された秋田市坂ノ上F遺跡(縄文時代中期初頭)は円筒土器と大木式土器に北陸系の土器が伴って出土しており、検出された大形の住居跡は長軸が19.1mある。その性格については種々の問題があるとしながらも「共同作業場」説が支持され、やや離れた地点から同時期の2段構造の床面をもつ住居跡などが検出されている。また、能代市杉沢台遺跡(縄文前期末から中期初頭)でも、大形の住居跡が4軒検出され、周辺の小形・中形の住居とは違った性格をもつものとし、多人数が集まる機会に使用された建物とされている。蟹子沢遺跡のS I 08・31についてもその規模や時期から共同施設の可能性が考えられる。

また、1994年に秋田市教育委員会が調査区に南接する区域^(注1)でおこなった調査で、平面形が楕円形を呈すると考えられ、地床炉をもち床面が2段構造をなす竪穴住居跡が検出されている。床面より半円状扁平打製石器が出土しているが時期は特定できていない。

土坑は覆土堆積状況が人為的なもの(SK28・37・57)、自然堆積のもの(SK42・44・51)とに分けられた。用途や時期を特定できる資料が乏しかったが、SK28・51は出土遺物から縄文時代中期に位置づけられる。覆土に石器や多くの割片と焼土などが混入していたSK37は捨て場として使用されたものであり、SI31に近接しておりその関連施設と考えられる。SK44はその規模や形態等から食料貯蔵を主とした機能が推定され、時期は出土土器から縄文時代晩期もしくはそれ以前と考えられる。SK57は年代測定(¹⁴C)の結果、平安時代の年代が与えられており、この時代に構築された可能性を示している。SK42は同伴遺物もなく時期・性格とも不明である。

土器埋設遺構は4基検出された。土器を埋設する掘り方の平面形は、円形や槽円形および隅丸方形を呈し、深鉢形土器を正位に埋設していた。時期は土器から縄文時代中期(SR36・50・52)と晩期(SR24)があり、その性格は埋葬施設の墓と考えられる。

柱穴様ピットは6基検出され、SKP54・55・59・60の4基は、各位置から壁・床などを土地造成で削平された堅穴住居跡の柱穴であった可能性がある。時期はSKP55出土土器から縄文時代中期前半と考えられる。

2. 遺物について

出土遺物のうち土器は、その大半が縄文時代前期末葉から中期前葉の土器であり、縄文時代前期・晩期、弥生・平安時代の土器はわずかであった。

縄文時代前期のI群土器には、木目状捺糸文が横位に施されるものがあり、こうした文様の施文は大木2a式土器に比定されると思われる。また、縦位の捺糸文や織維を含むことから前期に属する土器もここに類別した。

II群の土器は縄文時代前期末葉から中期前葉の土器であり、出土土器の中でも量的にかなり多く蟹子沢遺跡の中心となる土器群である。円筒土器(a類)、大木式土器(b類)、北陸系の土器(c類)が混在しており、秋田市周辺におけるこの時期の典型的な様相を呈している。

II群a類は横位に爪形文が施されたり、絡条体や縄文原体の側面圧痕が施された土器で、円筒上層a式土器に比定されるものが中心であるが、円筒下層d式土器との区別は判然としない。胎土には砂粒を多く含み焼成もあまり良好ではない。

II群b類は交互刺突文・三角印刻文が施文された土器や、縄文原体の側面圧痕を基調としてこれに粘土紐隆帯による文様が施された土器である。前者は大木7a式土器、後者は大木7b式土器に比定される。また、隆帯に縄文原体の側面圧痕が施され、円筒土器と大木式土器の特徴を合わせもつ土器もある。胎土は緻密で焼成も良好である。

II群c類は、半截竹管による平行沈線が施される北陸系の土器である。器形がキャリパー形をなし口縁部文様帯に縦位の平行沈線が密に施された土器や、蓮華文が表出されている土器で

あり、前者は北陸地方を中心に分布する新保式土器に後者は新崎式土器に比定される。これら北陸系の土器は、陸帯に縄文原体の側面圧痕や体部にY字形文などが施され、円筒土器や大木式土器の特徴が加味され在地で作られた可能性が高い。また、玉抱三叉文が施されたものがあり、新崎式土器と平行する五領ヶ台式土器の影響も受けている。

Ⅲ群は縄文時代晩期の土器であり大洞BC・C₁・A式土器に比定され、弥生時代の土器は前期から中期頃、平安時代の土師器・須恵器は9世紀後半と考えられる。

以上、蟹子沢遺跡は縄文時代前期末葉から中期前葉において共同施設の可能性が考えられる大形の住居が作られたことがわかったが、周辺の住居跡との関係については考察資料が乏しく不明である。また、当該期の東北地方北部から北海道南部に分布する円筒土器様式の土器と東北南部に分布する大木式土器様式の土器が出土し、これに北陸地方の土器に類する土器が伴うことから、縄文時代前期末葉から中期前葉における、この地域の特色を示している遺跡であることがわかった。

また、弥生・平安時代にも人が住み生活していたことが窺われるが、今回の調査地区では、それらの様子を具体的に示す遺構が検出されなかったため、内容は不明である。しかし、未調査の遺跡部分では、平安時代の須恵器片などが表採できることから、本調査で得られなかった情報を提供する遺構が存在するものと予想される。

註1. 秋田市教育委員会『蟹子沢遺跡—宅地造成に伴う緊急発掘調査報告書—』1995(平成7年)

引用・参考文献

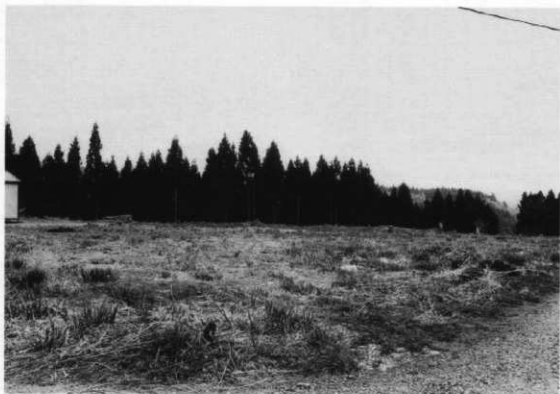
1. 富樫泰時「秋田県における北陸系の土器について」『本荘市史研究4』本荘市史編さん室 1984(昭和59年)
2. 秋田県教育委員会『杉沢台・竹生遺跡発掘調査報告』秋田県文化財調査報告書第83集 1981(昭和56年)
3. 秋田市教育委員会『秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書—下堤E遺跡・下堤F遺跡・坂ノ上F遺跡・狸崎A遺跡・湯ノ沢D遺跡・深田沢遺跡—』1985(昭和60年)
4. 秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ—上ノ山Ⅰ遺跡・館野遺跡・上ノ山Ⅱ遺跡—』秋田県文化財調査報告書第166集 1988(昭和63年)
5. 秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ(補遺)—上ノ山Ⅱ遺跡—』秋田県文化財調査報告書第186集 1989(平成元年)



1. 調査区遠景上空から（東▷西）



2. 調査区全景上空から（真上）



1. 市道西侧調査前近景 (南西▷北東)



2. 市道东侧調査前近景 (北西▷南東)



1. 市道東側調査前東端部近景 (南東▷北西)



2. 市道東側調査前南東端部近景 (北▷南)



1. 市道西側調査後近景（西▷東）



2. 市道東側調査後近景（北西▷南東）



1. 市道東側調査後東端部近景（南東▷北西）



2. 市道東側調査後南東端部近景（北東▷南西）



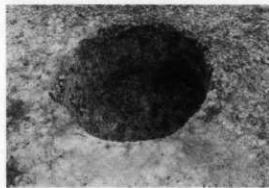
1. S108 (南▷北)



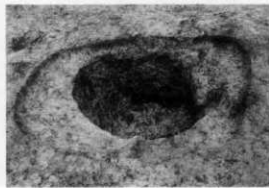
2. S108地床炉 (東▷西)



3. S108Pit12 (南▷北)



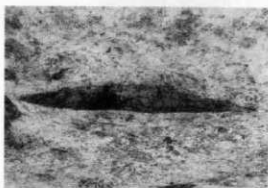
4. S108Pit13 (北東▷南西)



5. S108Pit14 (東▷西)



1. SI31 (南東▷北西)



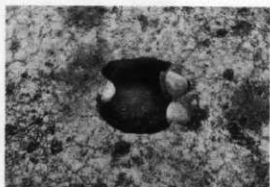
2. SI31地床炉 (東▷西)



3. SI31Pit2 (南東▷北西)



4. SI31Pit4 (南東▷北西)



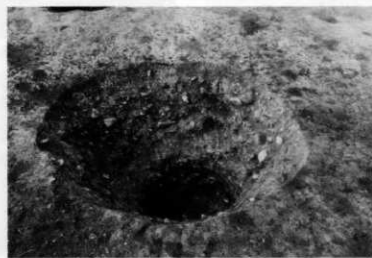
5. SI31Pit5 (南東▷北西)



1. SK28 (南▷北)



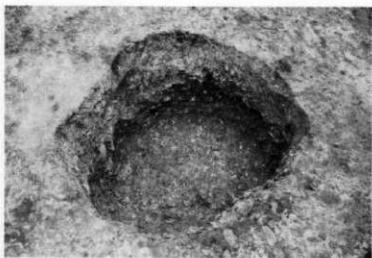
2. SK37 (南東▷北西)



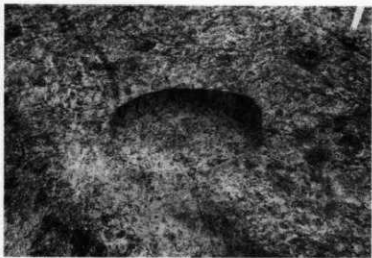
3. SK42 (南▷北)



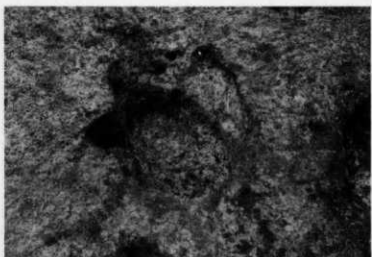
1. SK44土器出土状況(南▷北)



2. SK44(南▷北)



3. SK51(東▷西)



1. SK57 (東▷西)



2. SR24 (南▷北)



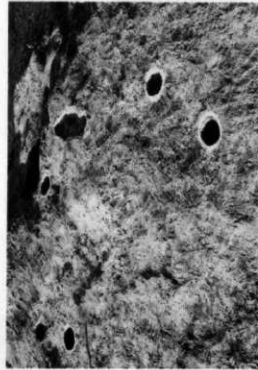
3. SR36 (南▷北)



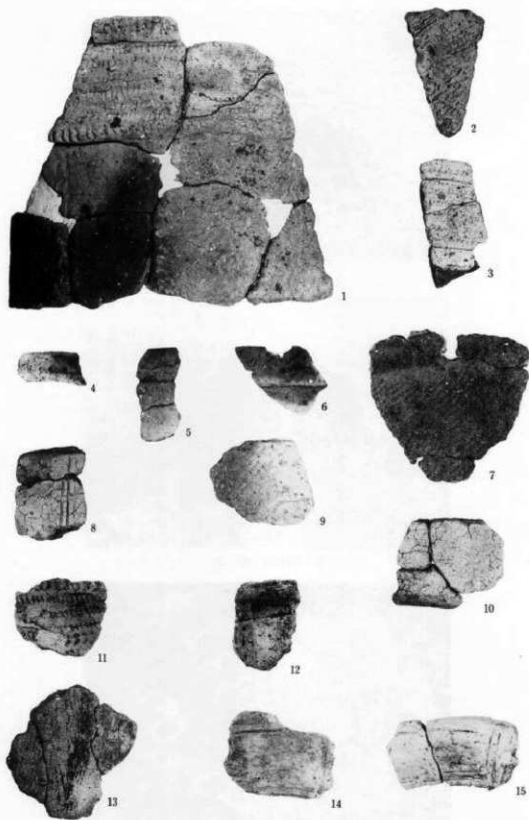
1. SR50 (南 Δ 西)



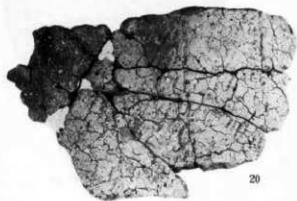
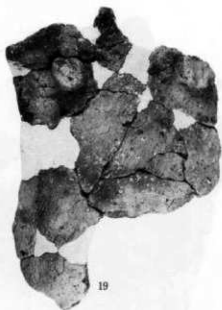
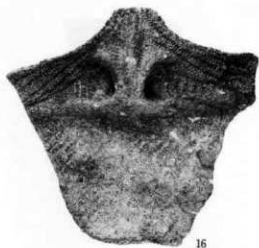
2. SR52 (南 Δ 北)



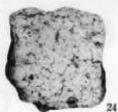
3. SKP54-55-59-60 (南 Δ 北)



遺構内出土土器（1）



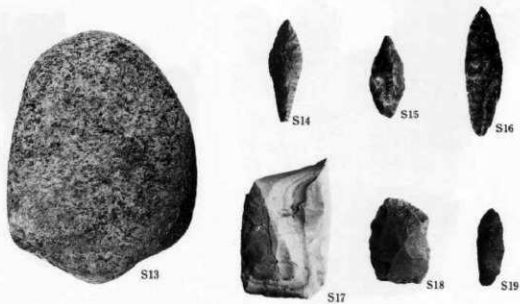
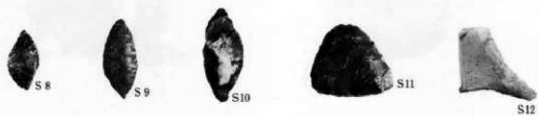
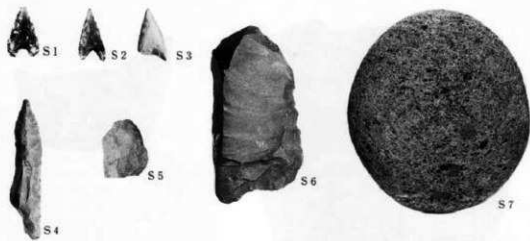
遠橋内出土土器(2)



遺構内出土土器(3)



遺構内出土土器(4)



遺構内出土石器



32



33



34



35



36



37



38



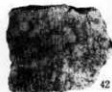
39



40



41



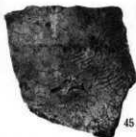
42



43



44



45



46

遺構外出土土器(1)



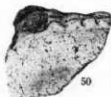
47



48



49



50



51



52



53



59



54



55



56



57

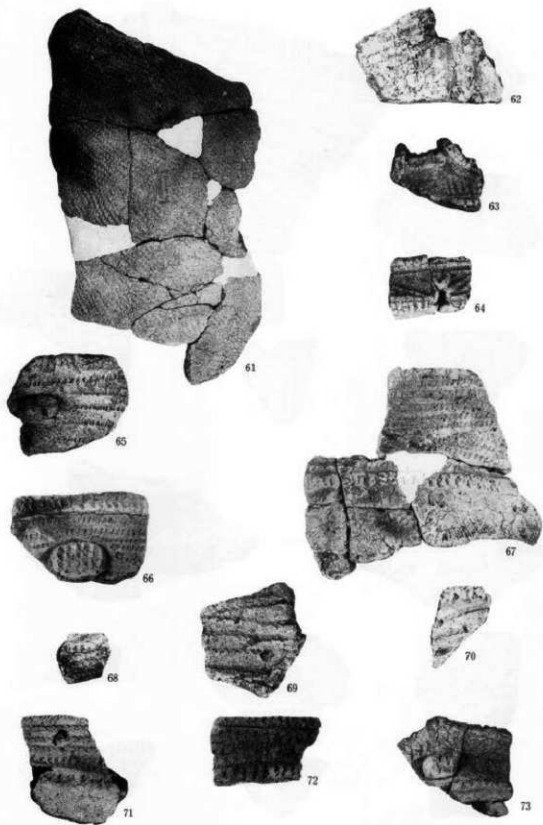


58

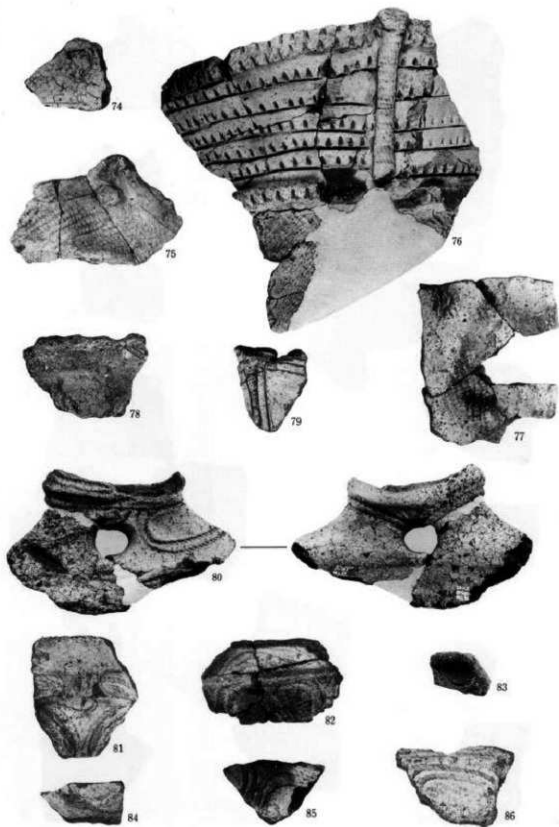


60

遺構外出土器(2)



遠構外出土土器 (3)



遺構外出土器 (4)



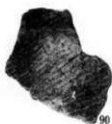
87



88



89



90



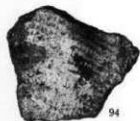
91



92



93



94



95



96



97



98



99



102



100

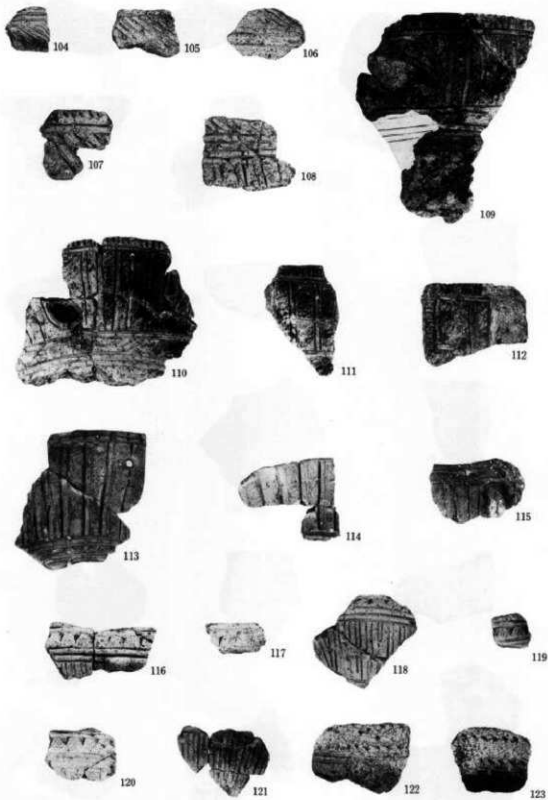


101



103

遺構外出土器 (5)



遺構外出土器(6)



124



126



127



125



129



130



128



131



132



133



134



135



136



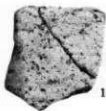
137



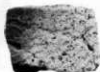
138



139



140

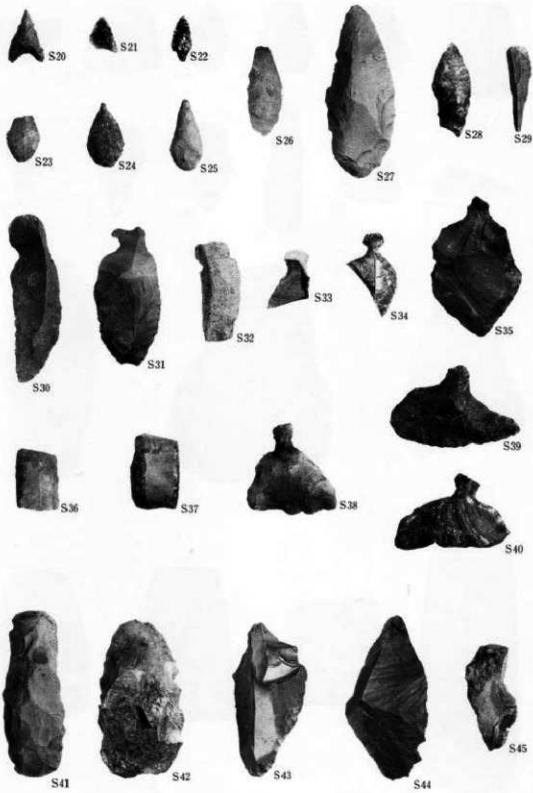


141

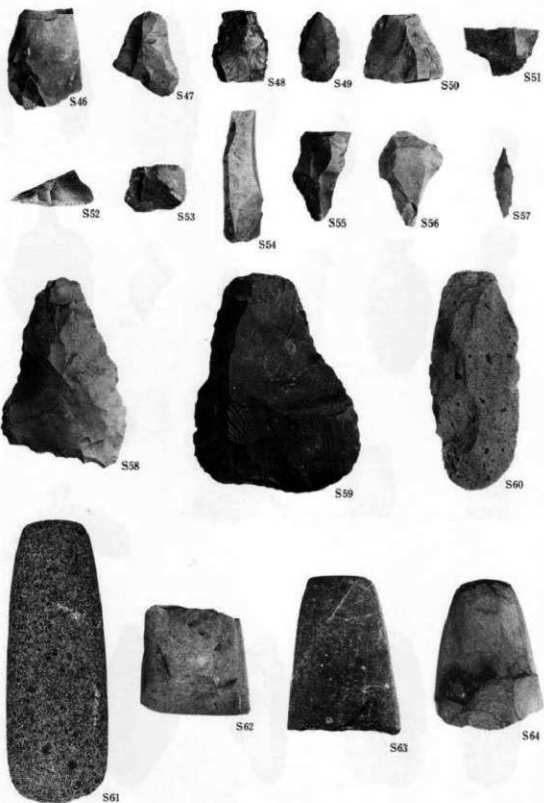
遠構外出土土器 (7)



遠構外出土土器・土製品（8）



遺構外出土石器(1)



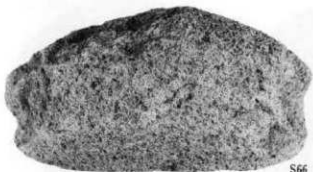
遺構外出土石器(2)



S65



S67



S66



S68



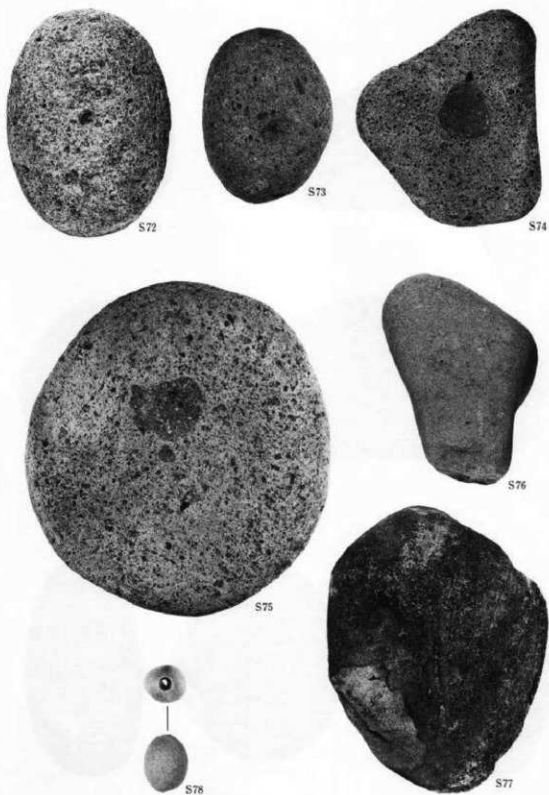
S69



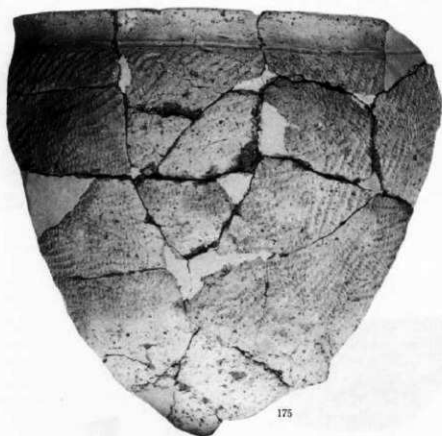
S70



S71



遺構外出土石器・石製品（4）



175



176



177



179

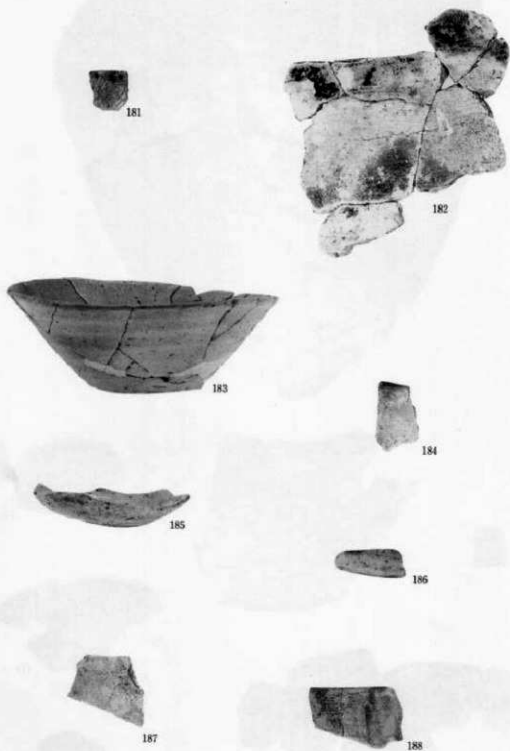


178

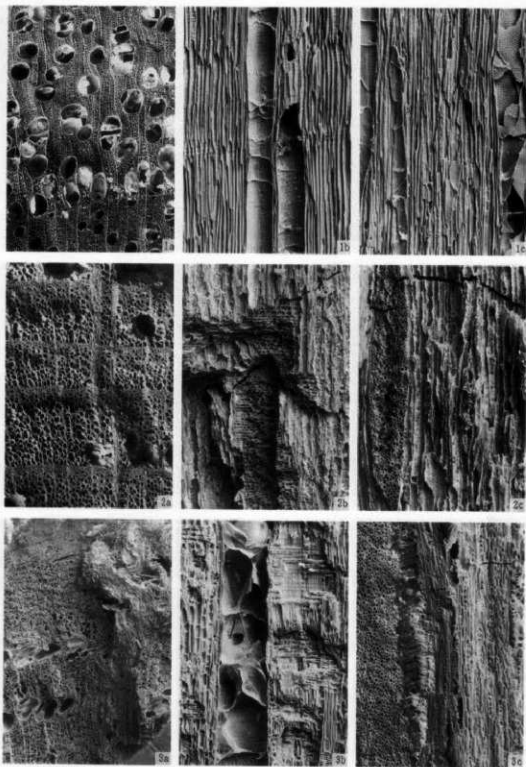


180

遠橋外出土土器(9)



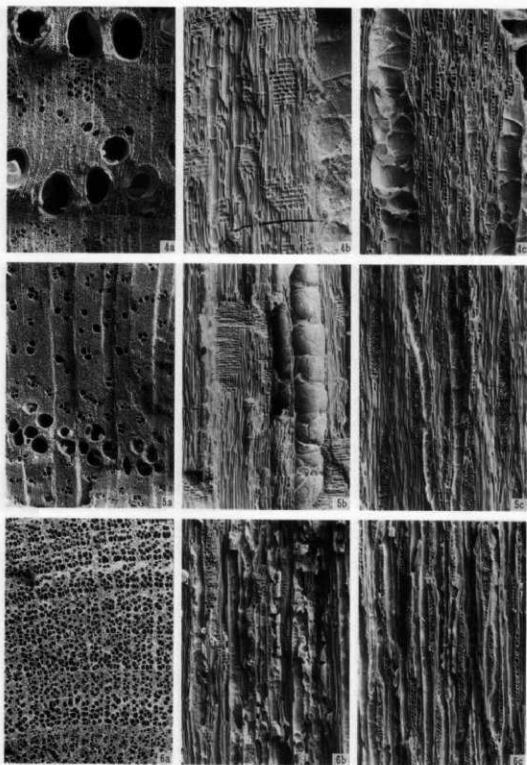
遺構外出土器 (10)



1. オニグルミ (試料番号①)
 2. ブナ属 (試料番号②)
 3. コナラ属コナラ亜属コナラ節 (試料番号③)
 a: 木口, b: 径目, c: 板目

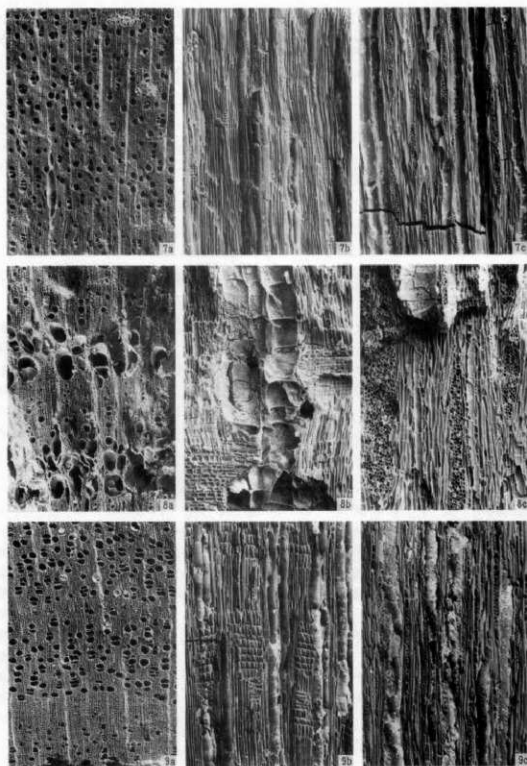
200 μm : a
 200 μm : b, c

炭化材 (1)



4. クリ (試料番号③)
 5. ヤマグイ (試料番号④)
 6. サクラ属 (試料番号④)
 a: 木口, b: 板目, c: 板目

200 μm : a
 200 μm : b, c



7. カエデ属 (試料番号④)
 8. ケンボナシ属 (試料番号⑤)
 9. エゴノキ属 (試料番号③)
 a: 木口, b: 径目, c: 板目

200 μ m : a
 200 μ m : b, c

炭化材 (3)

報告書抄録

ふりがな	とうほくおうだんじどうしゃどうあきたせんほくくわがきまうこくし		かござわいせ					
書名	東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XX 一蟹子沢遺跡一							
副書名								
巻次	20							
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第261集							
編著者名	栗澤光男・藤澤 昌							
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター							
所在地	〒014 秋田県仙北郡仙北町弘田字牛輪20		TEL 0187-69-3331					
発行年月日	西暦1996年3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
かにこまわ 蟹子沢	あきたけんあき 秋田県秋 たしにこまわ 田市濁川 あきたにこまわ 字蟹子沢 ほか 44-10外	2201		39° 45° 18'	140° 08° 15'	19940511 5 19941007	7,000	東北横断 自動車道 遠野秋田 線建設事 業に係る 事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
蟹子沢	集落跡	縄文時代 前期末葉～ 中期前葉 縄文時代 晩期 弥生時代 平安時代	竪穴住居跡 2軒 上坑 6基 土器埋設遺構 4基 柱穴横ビット 6基	縄文土器・石器 弥生土器 土師器・須恵器	縄文時代前期末 葉～中期前葉の 共同施設の可能 性がある大形の 竪穴住居跡を検 出した。また当 該期の円筒土器 大木式土器・北 陸系の土器が出 土した。			

あとがき

1994年夏は記録的な猛暑が続きました。地上の気温が連日40度近くになる苛酷な条件下で調査を継続するには、こまめに水分を補給し休息時にはできるだけ体を休めることが必須条件でした。しかし、水分を補給しきれない調査区の地山は堅く、しかもひび割れてしまい、調査をさらに困難なものにしました。降雨を待つことをあきらめ、麓の用水路から軽トラックで水を運び上げ散水しながらようやく調査を終えることができました。

調査ではあまり見慣れない北陸系の土器が出土しました。石川県の真脇遺跡や徳前C遺跡出土土器と実見比較し、蟹子沢遺跡の土器は搬入されたものでなく在地で作られたことを直感しました。また、石川県で出土した土器にも確実に円筒土器の要素が加味されているものがあり、当時の人々が日本海沿岸を舞台に広く交流していたことに改めて驚かされました。土器は文化の広がりや融合を示す確かな証拠です。縄文時代から様々な文化が伝播融合し個性豊かな地域文化が創造され続けてきたものと思われまます。

最後に、発掘作業及び整理事業に携わった方々の名前を記して感謝致します。

(発掘作業) 小笠原義雄 佐々木金治郎 鈴木市太郎 鈴木 銀・鈴木 末蔵 鈴木 長治
長谷部鉄治 三浦 金司 三浦 竹治 水野 金光 若月 春吉 鈴木 一彦 鈴木 肇
石井いさ子 石井 京子 石井よし子 板見谷トキ 伊藤 茂子 大山なみ子 尾川 泉
鹿子澤ミサ 工藤 龍子 熊谷 信子 熊谷 文子 佐々木暁子 佐々木哉子 佐々木たき子
鈴木ウメノ 鈴木 キヨ 鈴木 博子 鈴木ルミ子 高島 綾子 竹谷 記子 三浦アエ子
三浦 キミ 三浦 タキ 三浦千枝子 三浦 初枝 宮田トキ子 矢野富英子
(整理事業) 藤田 悦子 草薨 美香 小柳 和子 小松 睦子 藤澤由希子 藤原 堅晃

秋田県文化財調査報告書第261集

東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XX

— 蟹子沢遺跡 —

印刷・発行 平成8年3月
編 集 秋田県埋蔵文化財センター
〒014 仙北郡仙北町弘田字牛嶋20番地
電話 (0187) 69-3331
発 行 秋田県教育委員会
〒010 秋田市山王4丁目1番2号
電話 (0188) 60-3193
印 刷 結 巧 堂 印 刷 所